相の谷１号墳出土埴輪についての諸問題

山内　英樹

１．はじめに

相の谷１号墳は、愛媛県最大の古墳(前方後円墳)であり、長大な竪穴式石室や葺石構造を有し、青銅鏡２面を含め貴重な副葬品が確認された広域首長層の墳墓である。埴輪についても今回の再整理作業の結果、これまで一部の資料しか公表されなかった各種埴輪の様相が明らかになった。

そこで本稿では、出土埴輪の形態分類を行うことで、その形態的・製作手法的な特徴を抽出し、近年研究の進む前期古墳の埴輪研究を参考に、本古墳出土埴輪の相対的位置付けを試みることにしたい。また、発掘調査時の取り上げデータを参考にしながら、可能な限り出土位置の把握に努め、各種埴輪の樹立状況について僅かながら検討を行い、本古墳の基礎整理作業の成果としたく思う。

２．各種埴輪の分類

（１）円筒埴輪

僅かに鰭の可能性が考えられる破片資料も認められるが、基本的に普通円筒埴輪である。口縁部、突帯形状、胴部の文様や器壁厚など、類型化のための属性は幾つか認められ、複数の円筒埴輪類型を抽出できる。そこで先ず、各属性の分類を試み、本古墳出土の円筒埴輪を評価したい。

①　属性分類

口縁部は全体的な数量が少なく、分類自体が困難な面もあるが、確認できる範囲では以下の２種類に分類できる。なお、以前に森毅氏が分類した口縁部Ｃ類(森 1983)については、後述する壺形埴輪の口縁部に相当すると思われるので、今回の分類には含まない[1)]。

Ａ類：口縁部が短く直線的(もしくはやや外傾)にのび、端部付近で屈曲するもの。

Ｂ類：口縁部が直線的もしくは、やや外反しながら外側に開くもの。

いずれも口縁端部はナデにより尖り気味で、粘土紐接合痕が認められる個体もある。Ｂ類については、端部が尖るものの他に、端部上面に面を有するものが存在し、両者の中間形態とも考えられる。

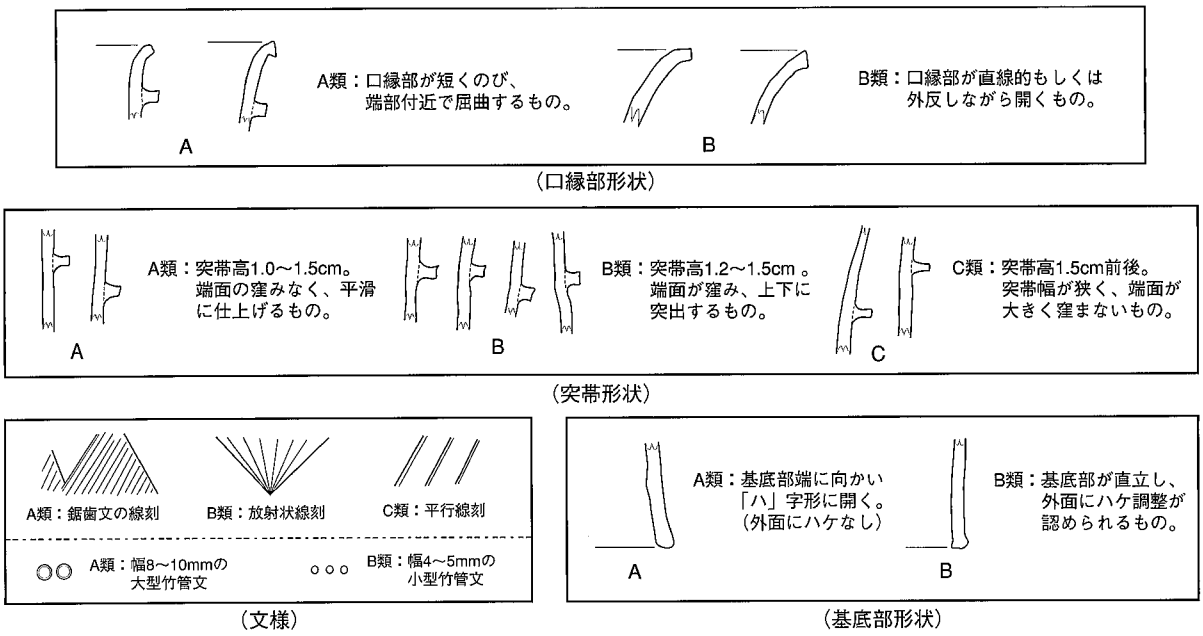
突帯形状については、貼付時のナデの強弱により細部に多様性が認められるが、貼付幅や突帯高、端面の形状や突出具合から判断し、概ね以下の分類が可能と考えられる。

Ａ類：突帯高1.0～1.5㎝で、ナデにより端面の窪みが目立たない(もしくは平滑に仕上げる)もの。

Ｂ類：突帯高1.2～1.5㎝で端面がナデにより窪みを有し、上下端がやや突出するもの。なかには突帯幅が非常に広い一群も認められる。

Ｃ類：突帯高1.5㎝前後と高めで、端面は大きく窪まないもの。突帯幅が非常に狭く、指ナデにより上方へ若干屈曲(湾曲)する個体も認められる。

器面調整にはハケ、ナデ、オサエ、ケズリが認められる。ハケは原則８～10本/㎝の細かな原体を用いており、ナナメもしくは横方向の断続的なものである。ナデやオサエはほぼ全ての個体で見られるため分類対象とはしづらいが、内面のケズリは重要な指標となり得る。



第１図　円筒埴輪・属性分類

文様構成については外面に施され、線刻および竹管文が認められる。線刻は以下の分類を示す。

A類：鋸歯文の線刻。左および右上がりのものが認められる。

B類：一端から放射状にのびる線刻。A 類よりも大型のものが目立つ。

C類：鋸歯文とは特定できず、斜線および直立した線刻が連続するもの（２本単位もあり）。

そのうち、B 類は A 類とのセットで認められる場合が多く、C 類とはほぼ組み合わない。また鋸歯文の左右の相違については、規則性または工人の利き手による可能性が想定できる。

竹管文は原体が二つに分類できる。

A類：幅８～10㎜の大きめの竹管文。２個単位で認められるもの（A１）と、１個単位（A２）がある。

B類：幅４～５㎜とかなり小さな竹管文。

この場合、A・B 類がセットで認められる例は未だになく、明確な使い分けが存在するようである。

スカシは確認できる範囲は長方形で、突帯間隔が判断できる資料がないため詳細は不明だが、全周する個体（７）では、１段に４方向のスカシが配置されており、突帯を挟み上段にはスカシ孔が認められないことから、スカシ無しの段が認められる可能性が極めて高い。

器壁については、0.6～1.0cmと薄く仕上げられているが、その中でも、**A類**：器壁1.0cm前後の個体、**B類**：器壁0.6～0.8cmのかなり薄めの個体、に大別可能である。また、器壁に加え、各個体の傾斜（直立・傾斜）についても、上部構造および下部構造の把握の際には十分注意を払う必要がある。器面には赤色顔料の塗布がほとんどの個体で認められる。

基底部は胴部同様に厚みをあまり持たず、基底部端は丁寧なナデおよび指オサエにより自重による潰れを消す「基底部正立調整」（山内 2003a・2003b）であるが、若干の相違は認めることができ、

A類：基底部端に向かい「ハ」字形に裾開きになるもの。外面にはハケが認められない。

B類：基底部が直立し、外面に細かなタテハケ調整が認められるもの。

に大別される。基底部径は31～33cmと一定しているが、40cmを超える大型品(44)も一部認められる。

② 類型化

以上の属性分類を踏まえ、その組み合わせにより導き出した円筒埴輪の分類案が第1表である。口縁部形状および基底部については各類型との対応関係に不明な部分が多いが、器面調整や突帯形状などで補完できるものと考える。現段階で想定可能な類型は以下のとおりである。

（ⅰ）円筒Ⅰ類

突帯を挟み、外面に鋸歯文や放射状の線刻文が認められる。竹管文は小型のB類が主体を占め、口縁形状は大きく外反するB類である可能性が高い。突帯径が40cmの大型品も多いことから、基底部もある程度の自重により裾開きのA類になったものと考える。主な個体としては7～10が該当する。

（ⅱ）円筒Ⅱ類

突帯はB類で、端部が大きく窪む個体が多い。突帯を挟み大型A類の竹管文が施され、2個単位のA1類と1個単位のA2類が存在する。断続ハケは8～10本/cmと非常に細かく、胴部内面にはケズリが認められる個体が存在する。胴径(突帯径)は30～35cmと一定しており、文様の多様性は認められるが、個体自体の規格性は高いものと考えられる。主な個体としては11～16が該当する。

（ⅲ）円筒Ⅲ類

形状自体は円筒Ⅱ類と共通する部分が多いが、胴部の傾斜が大きい点は注意を要する。文様は直立および斜線文の連続であるC類が採用され、器面調整には8～10本/cmと非常に細かな断続ハケ、胴部内面にはケズリが認められる。個体間のばらつきが大きく、文様がやや粗雑な印象を受ける。主な個体としては17～22が該当するが、他の類型に属する可能性も完全には否定出来ない。

（ⅳ）円筒Ⅳ類

突帯が幅狭のC類が主体を占め、器壁が薄く器面に鋸歯文を認めることのできる一群である。胴部および裾部付近は大きく傾斜し、突帯がやや屈曲気味になる個体も存在する。器面の断続ヨコハケは10本/cmときわめて細かく、丁寧な作りである。円筒Ⅰ～Ⅲ類と比較しても特徴的な一群である。主な個体としては25～28が該当するが、後述する朝顔形埴輪との対応関係も注目される。

以上、やや雑把ながら4つの類型化を試みたが、本古墳出土円筒埴輪の最大の特徴は、鋸歯文や竹管文に代表される加飾性にあると考える。これは、本来規格化された円筒埴輪では見られない傾向性

第1表　相の谷1号墳・円筒埴輪類型

類型	口縁部		突帯形状			器面調整		線刻文			竹管文		器壁		基底部		備考
	A	B	A	B	C	ハケ	ケズリ	A	B	C	A	B	A	B	A	B	
円筒Ⅰ類		△	△	○				○	○			○	○		○		大型品あり。
円筒Ⅱ類	△	△		○		○	○			○	○		○		△	○	竹管文単位の多様性。
円筒Ⅲ類	△	△	△	○		○	○	?		○			○	?		○	器壁の傾斜やや激しい。
円筒Ⅳ類	?	?		△	○	○		○						○		?	朝顔Ⅱ類の可能性高い。

（凡例）表中の○は確実に認められるもの、△は少数ながら可能性のあるものを指す。

であり、検討を要する課題でもある。また、器面調整にケズリを残す点や、長方形スカシ・断続ヨコハケ調整、さらには短小口縁と考えられる個体の存在(1・2)など、比較検討が必要な情報が抽出できることから、後節にて触れることとしたい。

(2) 朝顔形埴輪

全体形状については不明ながら、円筒埴輪とは形状的に異なる一群について、ここでは朝顔形埴輪の可能性を最優先して検討を進めてゆくこととする。

(i) 朝顔Ⅰ類

胴径(突帯径)が24～28cmと小さく、突帯が鍔状に取り付く個体を朝顔Ⅰ類とした。上端は外方へ張り出す形態を有するものと考えられ、上部には壺肩部が接合する可能性が高い。下部構造は不明だが、突帯に半円形の刳り込みが認められる個体も存在する。主な個体としては29・30が該当する。

(ii) 朝顔Ⅱ類

森氏が以前「不明埴輪」とした一群(森 1983)であり、実際には上下が逆転するものと考えられる。器壁が0.7cm前後と薄めで、突帯が厚めで途中から上方へ屈曲する一群である。胴径30cm前後で、長方形スカシを有し、外面には10～12本/cmのかなり細かな断続ヨコハケを施す個体も認められる。突帯内面には丁寧な連続指オサエが列状に並ぶ。

色調や器壁厚、器面調整などの諸要素からは、円筒Ⅳ類との共通性も多く認められることから、下部構造を復元する手掛かりになるものと思われる。主な個体としては31～33が該当する。

以上のように、本古墳で朝顔形埴輪と呼称した一群については、復元が困難である点から明確なことは言及できないが、古墳時代中期以降にみられる朝顔形埴輪とは形態上異なるものと考えられる。つまり、朝顔Ⅱ類にみられる屈曲した突帯は、壺を乗せる器台受部の形骸化したものとして理解しており、形式化(定式化)した朝顔形埴輪との過渡的形態と解釈する。

(3) 壺形埴輪

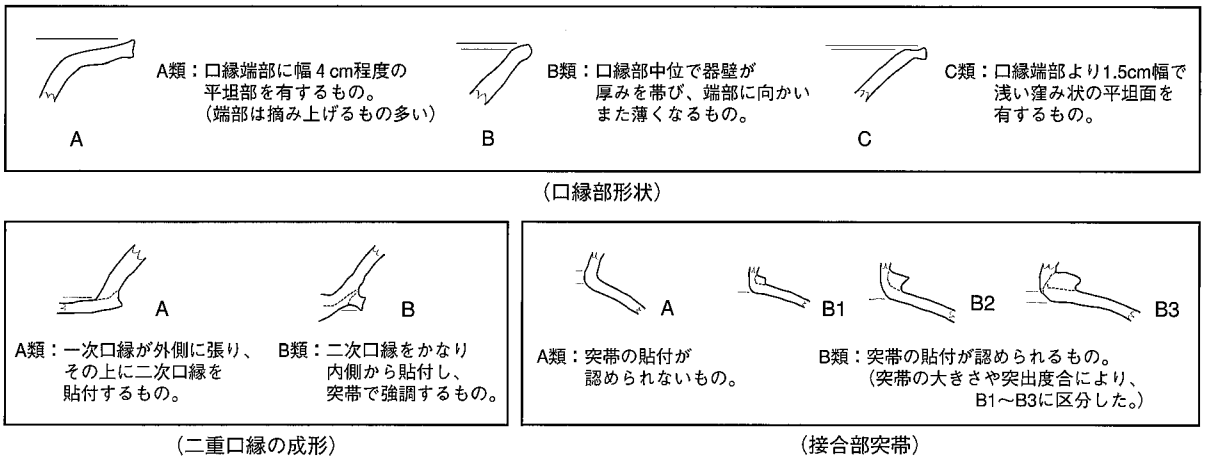
これまでの報告では、二重口縁の形態のみという理解であったが、今回の再整理で、新たに単純口縁の広口壺形態の個体を確認することができた。埴輪としての使用の問題は後述することにし、先ず各属性における分類作業を行い、その後、製作技法および調整などの諸要素から、各部位が如何なる相関性を有するのかを検討し、復元してみることにする。

① 属性分類

口縁部形態は、先述したように単純口縁と二重口縁の2種が認められる。ただし、口縁端部付近の形状については、いずれの器種も極めて類似する形態を持つことから、破片資料での判別は困難を極めるのが現状である。そこで、整理段階において基準とした分類を提示し、その特徴を列記する。

A類：口縁部は外傾しながらのび、端部から4cmほど手前で屈曲し、やや広めの平坦面を有する。端部はナデにより上方へ摘み上げるものが多い。

B類：口縁部中位で器壁が1.3～1.5cmと厚くなり、口縁端部で再び薄くなるもの。口縁部自体が短



第２図　壺形埴輪・属性分類

く、端部上面には僅かに平坦部を有する。

C類：口縁部が直線的に短く外傾もしくは外反し、端部より1.5cmほど手前で屈曲し、浅い窪み状の平坦部を有する。端部上面はあまり尖らない。

このうち、B 類は二重口縁の二次口縁部を指しており、後述する一次口縁部との接合方法などと合わせて検討する必要がある。また、端部の突出度合はナデの強弱に左右される。

二重口縁の接合形態および手法については、大別して２種類が認められるようである。

A類：一次口縁が屈曲して外側へ水平にのび、擬口縁を形成した後に内側へ二次口縁部を接合するもの。一次口縁の端部は大きく外方へ突出するものと、それほど出ない個体が存在する。

B類：一次口縁の上端部付近が大きく屈曲しながら外方へ短くのび、その後、二次口縁部をかなり内側（頸部付近）から貼り付け、接合するもの。接合部外面は突帯貼付で強調する。

このうち B 類については、後の朝顔形埴輪の製作手法にも共通点を見出すことができ、興味深い。

肩部（胴部）と頸部との屈曲部分については、突帯の有無より、**A類**：突帯貼り付けなし、**B類**：突帯貼り付けがある、の２種が認められるが、B 類については、短く突出（B１）、鋭く尖り気味（B２）、厚く丸みを帯びるもの（B３）と、さらに細分が可能である。

器面調整はハケ・ナデ・オサエ・ケズリが認められ、断続ハケ調整は10本程度/cmのかなり細かな原体を用いている個体がある。指オサエは頸部内側（一次口縁）および肩部内面に多く認められ、特に肩部内面には列状に密集する様子が見てとれる。ケズリは底部内面に認められるものがある。

また、器面には竹管文および線刻が認められる個体がある。竹管文には大・中・小が認められ、それぞれ A 類、B 類、C 類として区別しておく。線刻についても円筒埴輪と同様に、口縁部および肩部外面で鋸歯文が認められる個体があり、器種を越えた文様構成の共通性が注目される。

本古墳出土の壺形埴輪で最も注目されるのは、頸部の製作手法である。頸部から口縁部中位にかけて器壁が厚くなり、頸部下端付近が５～６㎜と非常に薄くなる点に注目すると、ある程度の乾燥工程を踏まなければ、頸部が自重により折れ曲がる可能性が高い。断面および接合痕観察によると、蔵本晋司氏が指摘している「擬頸部分割成形手法」（蔵本 1999）が採用されているものと考えられる。

肩部は良く張っており、長胴化の傾向は窺えない。器面にはハケ調整の顕著な個体とハケの認められない個体が存在するようである。底部については良好な資料が乏しいものの、確認出来るものは低部に若干の面を有し、自立可能なものであったと推測できる。なお、底面に焼成前穿孔が認められる個体も存在するが、不明瞭であり主体的ではないものと考える。

② 類型化

幾つかの属性分類を試みた段階で、その組み合わせを判断し、破片資料ながら個体の復元作業を行い、壺形埴輪の類型化を試みたのが第２表である。基本的には口縁部形態の相違に大きく起因する分類案ではあるが、逆に言うと、その他の製作手法では共通項が多いことの現れでもある。

（ⅰ）壺Ⅰ類

いわゆる広口壺の形態を呈するもので、口径30cm前後の個体が中心で、若干小型のものも確認される。口縁端部は尖り気味のＡ類で、胴部との屈曲部外面には基本的に突帯の貼付が認められない。

頸部下端は器壁が６mm前後とかなり薄く、頸部中位にかけて厚みを帯びる「擬頸部分割成形手法」を採用する。外面には10本/cmの細かなハケ調整が認められ、肩部内面には指オサエ列、底部内面にはケズリが施され、底面には平坦面を有する。主な個体としては58～64、80などを挙げておきたい。

（ⅱ）壺Ⅱ類

二重口縁を呈する個体で、口径30～35cmを測り、口縁部形状は端部付近に平坦面を広く持たないＢ類が主体をなすものである。一次口縁（頸部）と二次口縁との接合手法は、外方に張り出す擬口縁に内側から貼付して二次口縁を立ち上げるＡ類で、器面調整にあまりハケ調整を用いない。

頸部と胴部との接合手法は、壺Ⅰ類と共通の「擬頸部分割成形手法」を採用しており、屈曲部には小型の突帯Ｂ１類が主体をなすが、突帯貼付の無い個体も存在する。また、加飾性の強い一群もみられ、中型Ｂ類の竹管文が二次口縁部外面に認められる場合もある点に注意したい。

主な個体としては49～53・67・68・72・73などが該当すると思われる。

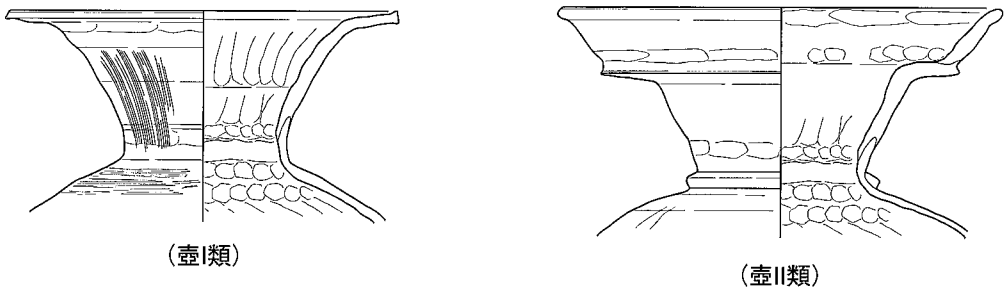
（ⅲ）壺Ⅲ類

二重口縁を呈するが、壺Ⅱ類と比較してかなり大型化するもの（口径40～50cm）であると思われる。口縁部形態は、おそらく端部上面に幅狭の窪み（面）を有するＣ類であり、Ｂ類にように二次口縁の中位がやや厚みを持つ。また、口縁部から肩部にかけてＡ・Ｃ類竹管文や鋸歯文がセットで施されるなど、加飾性が非常に強い点が特徴的である。

第２表　相の谷１号墳・壺形埴輪類型

類型	口縁部			二重口縁		接合部突帯				器面調整		文様		頸部手法	底部穿孔	備考
	A	B	C	A	B	A	B１	B２	B３	ハケ	ケズリ	竹管	鋸歯			
壺Ⅰ類	○			―		○	?			○	△			○	△	広口壺形態。
壺Ⅱ類		○	△	○		△	○	○		△	△	○	?	○	△	二重口縁（小型）。
壺Ⅲ類		△	○	○				○	?		?	○	○	△	?	二重口縁（大型）。加飾性富む
壺Ⅳ類			○		○			△	○						―	大型品。朝顔口縁部か？

（凡例）表中の○は確実に認められるもの、△は少数ながら可能性のあるものを指す。



第3図　壺形埴輪復元図（S=1/6）

胴部との接合部には、大きく突出した突帯B・C類が貼付される可能性が高く、頸部の接合手法は「擬頸部分割成形手法」を採用すると思われるが確定的ではない。主な個体としては56・57・69・83などが該当する。

（iv）壺Ⅳ類

二重口縁状を呈し、一次口縁(頸部)と二次口縁との接合手法は、擬口縁のかなり内側から貼付して立ち上げ、突帯を外面に巡らせるB類である。口径40～50cmが主体をなすと考えられ、口縁部形状は端部付近で狭い面を有するC類である。

胴部と頸部の接合手法には、これまでの壺形埴輪でみられた「擬頸部分割成形手法」が認められず、頸部が厚いまま下端まで到達する形状を呈する。大型の口縁部を載せるための補強とも考えられる。調整および色調、さらには後述する出土位置などから、朝顔Ⅱ類と接合する可能性が高い。

主な個体としては45～48・70・71・76・77などが該当する。

以上、本古墳における壺形埴輪分類を試みたが、特徴としては、①単純口縁(壺Ⅰ類)と二重口縁壺(壺Ⅱ・Ⅲ類)が揃って壺形埴輪として採用されている、②壺形埴輪の製作手法に「東四国系壺形埴輪」(蔵本 2004)と共通した特徴を見出すことが可能である、③壺自体は肩が大きく張り、長胴化の傾向性は認められない、など多岐にわたる。この点については後述する。

3　出土位置の傾向性

本古墳の発掘調査自体は墳丘西側が中心であり、実際には東半分は確認トレンチを除き、原地形をある程度留めている。当時の発掘調査で出土した埴輪もほぼ西側で出土したものであり、正確な位置とまではいかないが、各グリッドおよびベルトごとに取り上げたものが多く、その数量および個体分析により、ある程度の出土傾向を把握することも可能と考える。

そこで本節では、確認した破片資料約3,500点のうち、出土位置の確認可能な資料を抽出し、その大まかな傾向性と前節で示した各種埴輪の位置関係および用途の相違などの情報について、その概要を記すことにしたい。なお、破片資料のため属性認定には困難が伴うことを予め断っておく。

（1）調査区全体

出土埴輪の総数および各地点での出土傾向については、第3表を参照されたいが、出土総数3,545点のうち、数字的には円筒埴輪と壺形埴輪の比率がほぼ同じであり、一見するとその組成に差異は認

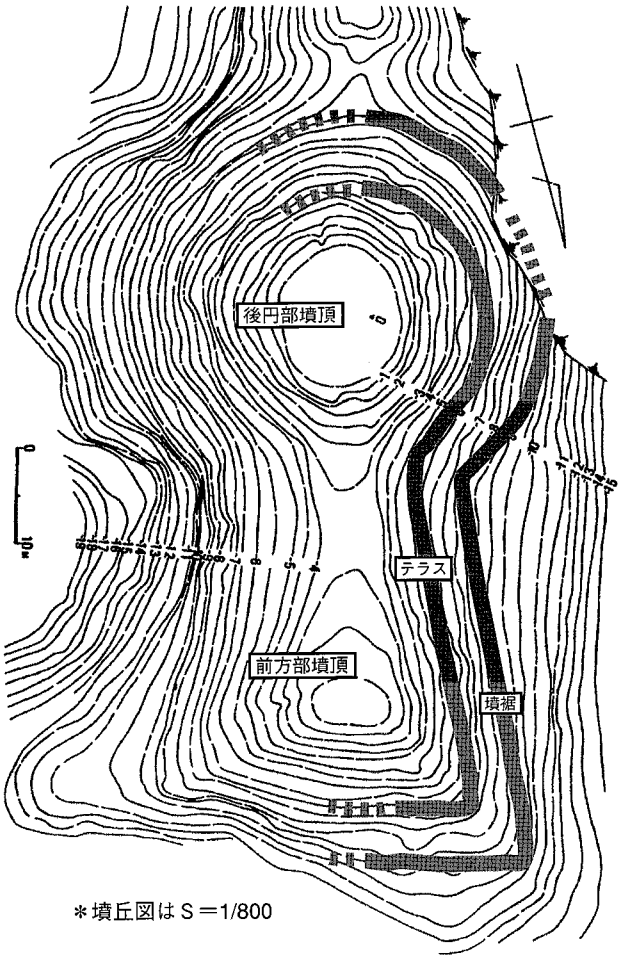
められないように思えるが、実際には、口縁部および突帯片などの比率を考慮に入れると、壺形埴輪の数的優位性を指摘することが可能である。

円筒埴輪については口縁部片の量が少ないこともあり、以前は壺形埴輪の口縁部A類を充てていたが(森 1983)、実際には円筒埴輪の個体自体が少ないことがその要因ではないかと考えている。基底部についても同様の可能性を考えているが、いずれも推測の域を出ない。

壺形埴輪は単純口縁の壺Ⅰ類が多数を占め、二重口縁を呈する壺Ⅱ・Ⅲ類の比率が低いと予想されるが、墳丘各部により樹立(配置)の量的比率は変化しており、一定の使い分けが認められる可能性が高い。頸部の製作手法については、上記の壺では同じ「擬頸部分割成形手法」が採用されることから、必然的にその破片数は多くなる。

(2) 各地点での出土傾向

ここでは大別して、①後円部(上・下段)、②くびれ部、③前方部(上・下段) に区分して説明を加える。なお、墳頂部の様相については、資料不足もあるため、各部の概要の後に若干触れておきたい。



後円部墳頂

・僅かながら円筒・壺形埴輪が確認できる。

後円部(上・下段)

・円筒埴輪は比較的少なく、突帯C類の個体が認められる(円筒Ⅳ類・朝顔Ⅱ類の可能性)。

・壺形埴輪は数量的には多いが、単純口縁の壺Ⅰ類が主体的で、二重口縁を呈する壺Ⅱ・Ⅲ類の比率が低い。

くびれ部

・円筒埴輪は一定量認められるが、中でも突帯C類を有する円筒Ⅳ類(朝顔Ⅱ類?)の比率が大きい。

・壺形埴輪は単純口縁の壺Ⅰ類に加え、二重口縁の壺Ⅱ・Ⅲ類が認められるようになる。

前方部(上・下段)

・円筒埴輪の比率がかなり高くなる。特に、竹管文や鋸歯文などの文様が多く認められる円筒Ⅰ・Ⅱ類の出土が目立つ。

・壺Ⅰ類は一定量認められるが、二重口縁の壺Ⅱ類の出土が極めて少なくなる(加飾性が高い個体あり)。

前方部墳頂

・円筒埴輪が僅かに認められる(樹立は確認できず)。

第4図　調査区での埴輪出土傾向

第３表　出土埴輪の傾向一覧

【出土総数】

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
13	21	158	65	1712	15	1	235	45	78	503	19	31	606	25	1	16	1

3,545点

【各地点の出土傾向】

（後円部墳頂）

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
0	0	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

5点

（後円部上・下段）

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
2	3	8	10	58	4	0	29	3	5	27	5	2	57	0	0	3	0

216点

（くびれ部上・下段）

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
1	1	56	31	794	5	0	86	26	33	198	5	7	193	13	1	4	0

1,454点

（前方部上・下段）

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
10	6	63	3	322	3	1	51	3	7	125	5	7	177	6	1	1	1

790点

（前方部墳頂）

円筒埴輪							壺形埴輪									朝顔	不明
口縁部		突帯		胴部	基底部	復元	口縁部		二重口縁	頸部	接合部突帯		胴部	底部	復元		
A	B	A・B	C				A	B・C	A・B		A	B					
0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

4点

註１）表中の「復元」とは、円筒埴輪は実測№７、壺形埴輪は№61を指す。
註２）くびれ部の個体数については、一部に前方部南側や後円部北西の個体が混じる可能性が高い。
註３）本表で用いられる「上・下段」とは、テラス部および墳裾部を指す。
註４）文様構成などの属性は、表中では触れていない。詳細は本文にて説明する。

① 後円部(上・下段)

後世の削平により墳丘自体が一部消失しており、築造当時の実態を反映しているとは言い難い。円筒埴輪は円筒Ⅱ類および突帯C類の形状を呈する円筒Ⅳ類(朝顔Ⅱ類の可能性あり)が比率としては多い印象を持つが、実際には円筒埴輪自体が量的に少ない可能性もある。

それに対し、壺形埴輪は単純口縁の壺Ⅰ類と二重口縁の壺Ⅱ類が一定量認められ、特に壺Ⅰ類の比率が高い。墳丘上段(テラス)での出土が多いことから、墳頂部もしくはテラス部に壺形埴輪を中心に、少数の円筒埴輪を配置したものと推測される。

② くびれ部

転落した埴輪が多く溜まる地点のため、破片数も必然的に多くなる。そのため、後円部および前方部の破片資料も混在する可能性もまた高いため、資料操作には注意を要する。

円筒埴輪は後円部と比較すると、数量的にかなり多く、種類も円筒Ⅰ～Ⅳ類まで多寡はあるものの認められる。特に円筒Ⅳ類の数量が目を引き、後述する壺形Ⅱ・Ⅲ類とあわせ、特定箇所での集中的な配置を意図している可能性も否定できない。

壺形埴輪は壺Ⅱ～Ⅳ類の比率が後円部と比較してかなり高く、二重口縁の破片数の増加と併せて考えると、壺Ⅱ～Ⅳ類の配置には何らかの規則性がみられるものと思われる。それに対し、壺Ⅰ類は一定量の割合で存在することから、前方部も含め、墳丘全体に巡る可能性を指摘しておきたい。

なお、朝顔Ⅰ・Ⅱ類(円筒Ⅳ類・壺Ⅳ類)とした個体が本地点で圧倒的に確認出来ることから、くびれ部中段もしくは裾部の一定空間に集中的に配置されたものと考えられる。

③ 前方部(上・下段)

本地点で最大の特徴は、円筒埴輪の数的優位性である。つまり、①・②地点で主体的ではなかった円筒埴輪が一定量配置されていた可能性が高く、主に竹管文や鋸歯文などの加飾文様の多い円筒Ⅰ～Ⅲ類が圧倒的である点は重要である。壺形埴輪にも竹管文を有する大型品(壺Ⅲ類)が認められることから、前方部では円筒埴輪と一体化した空間(加飾性を重視)が構成されるものと推測できる。

以上、大まかながら各種埴輪の出土傾向および配置について考察を試みた。樹立位置を留める個体自体が無く(可能性のある個体は存在)、現段階での復元は甚だ困難ではあるが、墳丘全体に均等な埴輪配列を施したとは考えにくい。また、墳頂部の様子は不明だが、後円部上段(テラス)に壺形埴輪(特にⅠ類)が多く転落することから、後円部墳頂には、主に壺形埴輪を中心とした囲繞がみられた可能性が高いと現段階では考える。

このような配置の相違が生じる一つの要因としては、墳丘各部の有する葬送儀礼に関する意味合いの相違があるためと考える。つまり、その意味合いの相違および伝統的な葬送儀礼を反映して、本古墳では埴輪配列および各種埴輪の樹立に選択性が働いたものと理解したい。

4 比較検討および相対的位置付け

相の谷1号墳の埴輪資料については、その分類案および使用状況などの検討を通じて、ある程度の傾向性や各類型の製作手法上の共通性など、種々の情報を抽出できたものと考える。しかし、県内に

は同時期の類例資料が無く、その年代的位置付けは困難と言わざるを得ない。

そこで、周辺地域(東四国・近畿など)の埴輪資料と比較検討することで、本古墳資料の相対的な位置付けを試みる作業を行い、製作手法および円筒埴輪と壺形埴輪のセット関係や、朝顔形埴輪の存在、さらには文様構成(鋸歯文・竹管文)などの諸問題について、若干の私見を述べることとしたい。

(1) 円筒埴輪の様相

相の谷1号墳資料の主な特徴としては、以下の点を挙げることができる。

① 口縁部、突帯形状、器面調整および文様構成などの諸要素から、概ね4つの類型(円筒Ⅰ～Ⅳ類)に大別することが可能である。

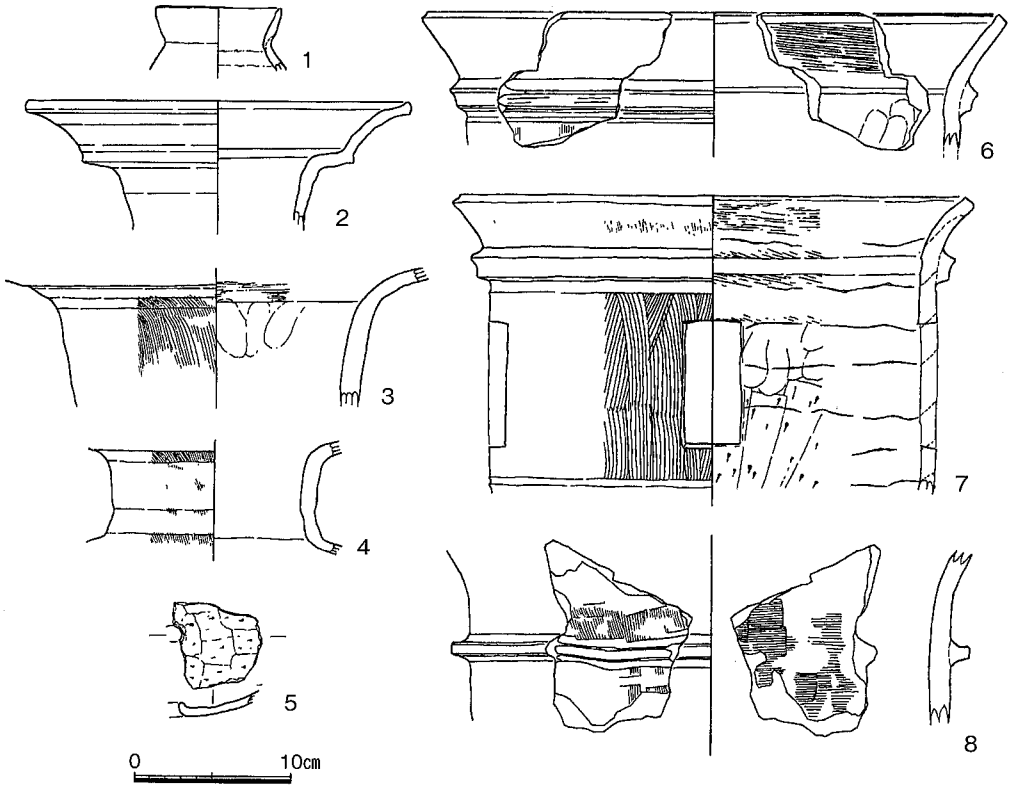
② 口縁部は短めの個体と大きく外反(外傾)するものがあり、突帯はナデによる窪みが目立つ。

③ スカシ孔は長方形で、確認できたものは4方向に穿たれている(1段間隔で)。

④ 文様には竹管文および鋸歯文を採用し、加飾性の強い個体あり(特に円筒Ⅰ・Ⅱ類)。

⑤ 器壁は薄く、赤色顔料の塗布が殆どの個体に認められる。

先述したとおり、同時期と考えられる類例資料が県内では未確認であるため、その比較検討を平野内で行うことは出来ない。高縄半島北西部に所在する今治市・妙見山古墳では、「伊予型特殊器台」(下條・小玉 1995)と呼称される器台と壺のセットが認められるが、円筒埴輪(器台系)として型式的には連続せず、相の谷1号墳との直接的繋がりを示唆するものではないと考えている。また、時間的に後続すると思われる、今治市・久保山古墳(正岡 2004)および松山市・櫛玉比売命神社古墳の円筒



第5図　快天山古墳出土の土師器・埴輪(近藤・大久保 2004 より引用)

埴輪(正岡 2002)についても不明な部分が多く、継続的な埴輪生産を示すものとは現段階では考えにくい。つまり、本古墳出土の円筒埴輪は、極めて限定的な埴輪生産の中で創出された個体と判断できる[2)]。

四国内で同時期の円筒埴輪生産が認められる地域には讃岐地方が挙げられる。特に高松茶臼山古墳での円筒埴輪の導入は、本地域の土器供献儀礼の画期として注目され、資料の中には器台系の受口状(二重口縁状)口縁を有する個体も認められるという。また、後続すると思われる姫塚古墳などでも円筒埴輪が確認されており(大久保 1996)、近年発掘調査が実施された快天山古墳では、二重口縁を呈する壺形埴輪を伴い、円筒埴輪が全周していた可能性が高い(近藤・大久保 2004)。相の谷1号墳の円筒埴輪は、快天山古墳と共通した特徴を有しているものの、器面の加飾性および埴輪の有する規格性の度合を考慮すると、やや古い様相を残している個体として理解できるものと考える。

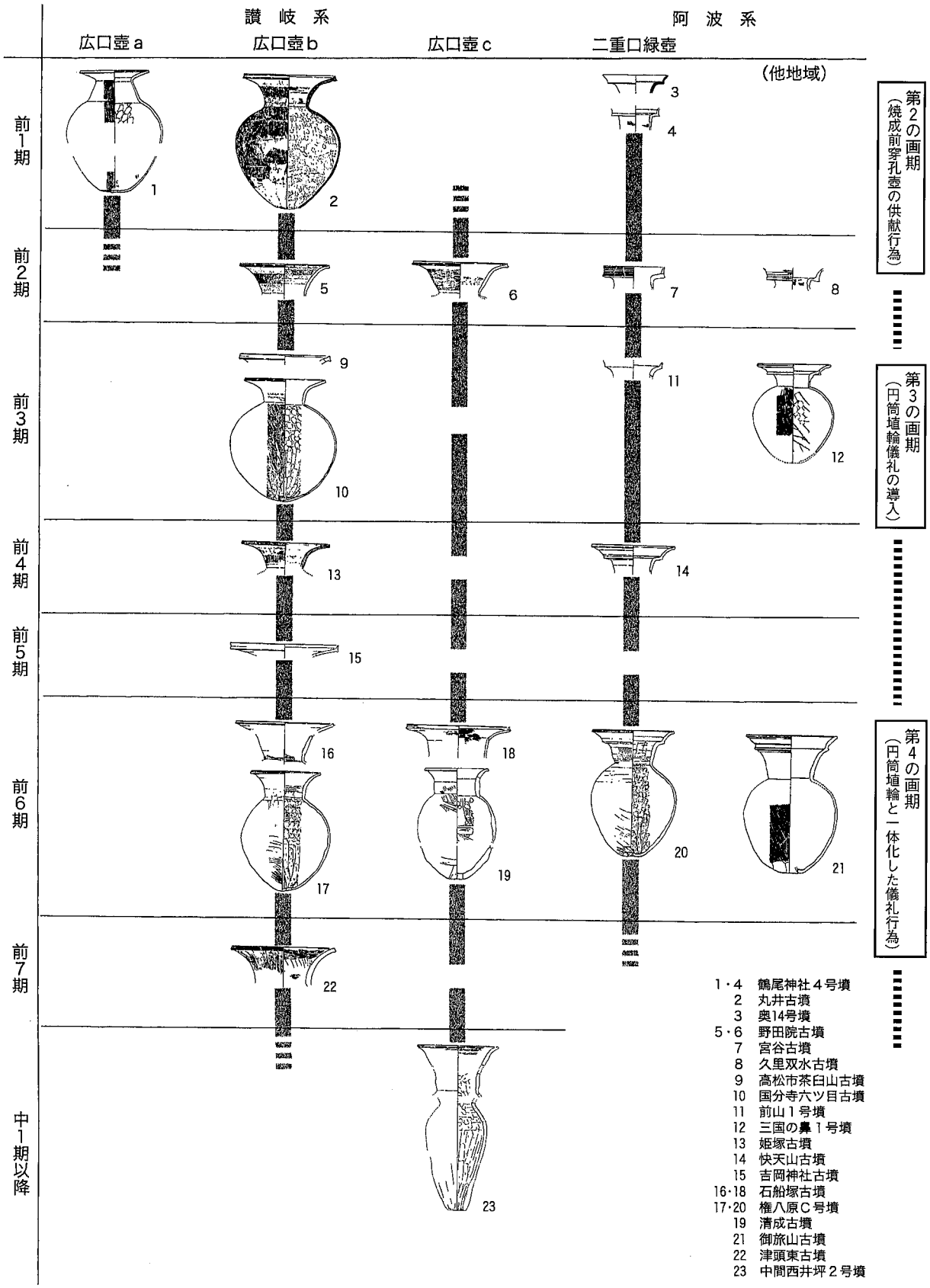
近畿地方における同時期の円筒埴輪様相については、一瀬和夫氏(一瀬 1998)、鐘方正樹氏(2001・2003)、加藤一郎氏(加藤 2000・2001)らをはじめとする諸氏により詳細な検討がなされており、本稿では相の谷1号墳資料を検討する参考としたい。相の谷1号墳資料は口縁部形状A類が普通円筒埴輪、B類が都月系埴輪に多い属性であり、鋸歯文や竹管文などの文様帯が存在し、円筒埴輪自体に多様性が認められる他、方形スカシが主体で円形の個体が一切確認出来ない点などを考慮して、鐘方氏の編年試案で概ねⅠ期4～5段階を想定しておきたい。

また、文様構成についても若干触れておく。相の谷1号墳のように鋸歯文および竹管文が認められる円筒埴輪は、四国内では殆ど確認されていない。中国地方では岡山県・陣場山遺跡の埴輪棺(矢部 1985)などにみられるほか、箸墓古墳(白石ほか 1984)や西殿塚古墳・東殿塚古墳(松本編 2000)などの特殊器台や都月系埴輪の古段階の個体に認められることが多い。壺に限ると、今治平野でも松木広田遺跡(白石 2002)などで広口壺の口縁外面に鋸歯文や竹管文が認められることから、施文自体は平野内で一部展開していた可能性はあるが、円筒埴輪での直接的なモデルとは言い難い。竹管文については、山陰地方で見られる「山陰型特殊器台形土器(埴輪)」(東森・大谷 1999)や伯耆・播磨などに点的に分布する特殊土器などに半截竹管文が連続する個体が認められるが、相の谷1号墳との直接的な関係は時間的な隔たりもあり想像しがたい。つまり、本古墳の文様構成は、地元での前代の施文方法を一部で踏襲しながらも、埴輪独自の文様構成として、極めて限定的に展開するものであると言える。

(2) 壺形埴輪の様相

本古墳の壺形埴輪については、その製作手法などにおいて「東四国系壺形埴輪」の特徴を有する点で、極めて特徴的な一群であることは先述のとおりである。また、筆者が壺Ⅰ類(単純口縁)・壺Ⅱ類(二重口縁)とした個体についても頸部製作手法は共通しており、その製作工人集団の出自なども含め興味深い資料である。そこで、これまでの「東四国系」壺形埴輪に関する各氏の理解を踏まえ、本古墳出土の壺形埴輪の位置付けを試みることとしたい。

蔵本氏が「東四国系壺形埴輪」と呼称した一群は、多量囲繞供献の成立を背景とした壺形土器の非



第6図 「東四国系壺形埴輪」編年（蔵本 2004 に一部加筆）

日常性がその定義の大きな要因であり、墳丘上に直接供献(配置)されるものと捉えている(蔵本 2004)。相の谷1号墳での壺Ⅰ類の出土状況は、後円部を中心として墳丘全体に配置されたものと考えられ、その形態的特徴とあわせ「東四国系壺形埴輪」の条件を満たすものと考える。また、二重口縁を呈する「阿波系」とされる壺Ⅱ類は、その出土状況および数量的に壺Ⅰ類には及ばず、配置も極めて限定的と想定されることから、壺Ⅰ類とのセット関係にありながら、実際には後述する朝顔形埴輪とのセット関係に重点が置かれるものかもしれない。

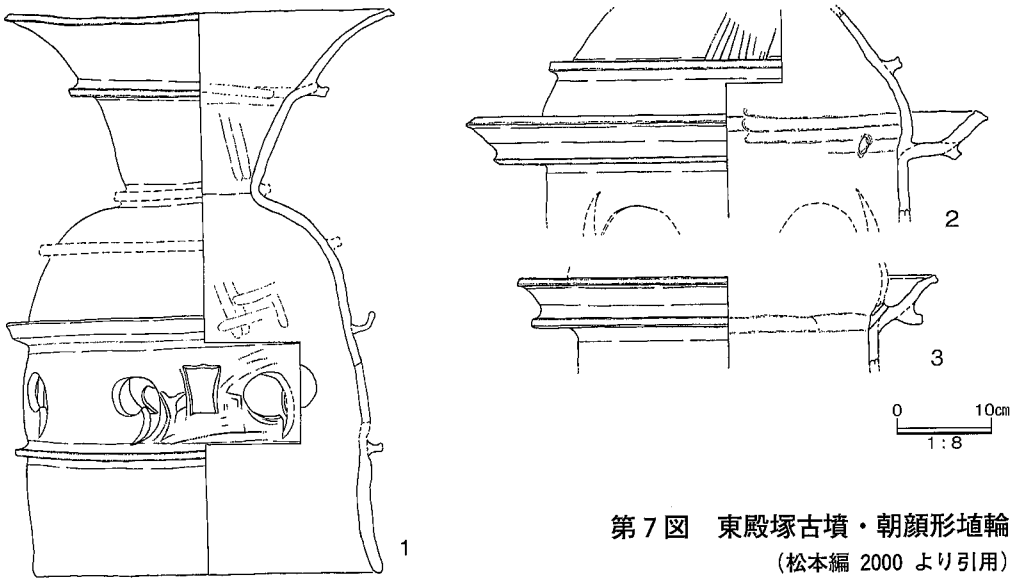
また、その相対的位置付けであるが、蔵本氏の編年案(蔵本 2004)によると、壺Ⅰ類は広口壺cに該当すると思われる。同類型として前2期に位置付けられている野田院古墳出土の個体(蔵本 2003)は、形態上は相の谷1号墳と類似するも、前者は精製品で、口縁端部の拡張が整っている点など、古相を呈するのに対し、後者はやや粗製で円筒埴輪とのセットで存在することから、野田院古墳の資料より後出するものと考えている。

また、相の谷1号墳資料は肩部の張りが強く、前6期以降に多く認められる長胴化する個体は認められない。県内でも松山市・小竹9号墳で壺形埴輪が確認されており(山内 2003c)、頸部は内傾接合で擬口縁が大きく張り出すものである。ただし長胴化し、器壁がやや厚みを持つもので、相の谷1号墳と比較して後出する要素が多い。さらに円筒埴輪の比較検討でも参考とした快天山古墳の二重口縁壺は、その前後関係を明確には指摘することは出来ないが、相の谷1号墳に焼成前穿孔があまり認められず、穿孔方法も異なる点で、同列に扱うには躊躇を覚える。以上の点より、現段階では本古墳出土の壺形埴輪を蔵本編年・前4期の範疇でひとまず捉えておきたい。

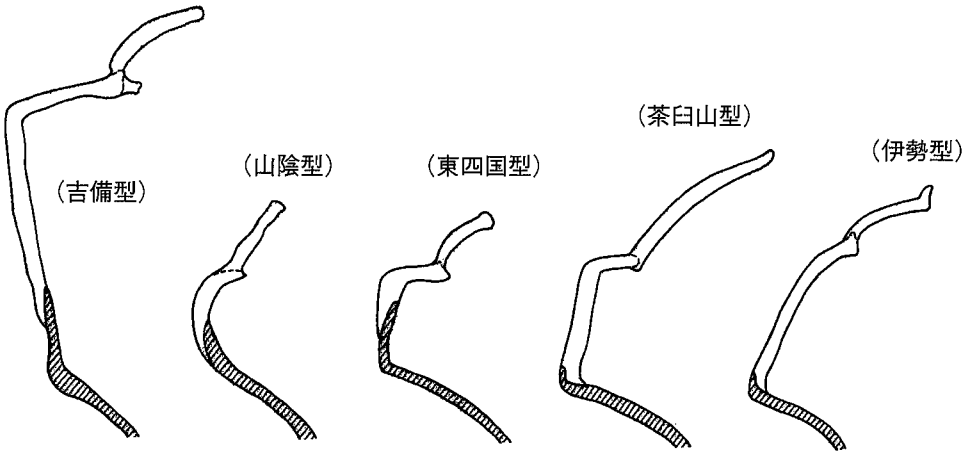
(3) 朝顔形埴輪の様相

本古墳ではごく僅かの破片資料であり、積極的に朝顔形埴輪を評価できるものではないが、ここでは可能性も含め、その類例資料との比較の中で評価を試みたく思う。

古墳時代前期前半に畿内で特徴的な朝顔形埴輪が出現するが、壺と器台を結合させた形状を痕跡と



第7図　東殿塚古墳・朝顔形埴輪
(松本編 2000 より引用)



第８図　二重口縁壺の型式と頸部成形技法（廣瀬 2006 より引用）

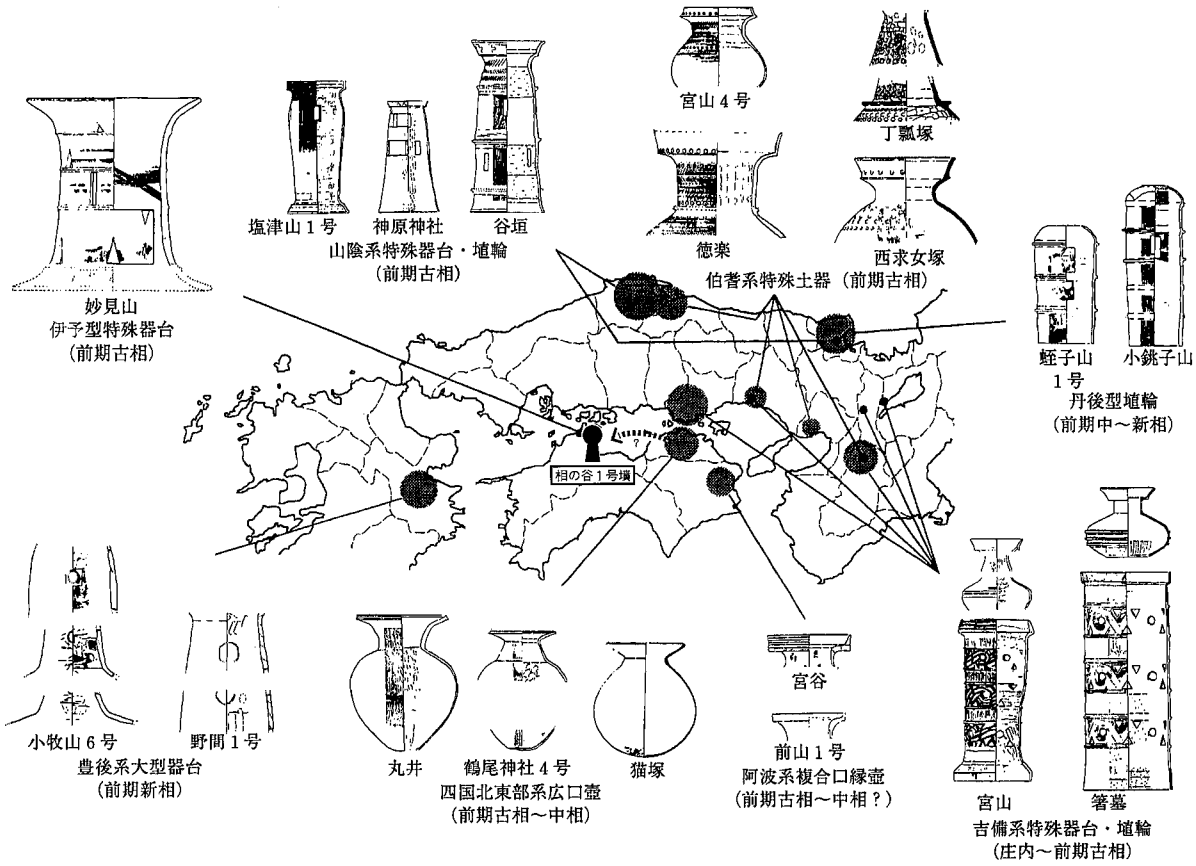
して残す個体が、天理市・東殿塚古墳（松本編 2000）や河内・玉手山古墳群（安村編 2001）で認められる。特に、最上段突帯が上方に屈曲し、受け口状を呈する点は、相の谷１号墳で出土した朝顔Ⅱ類の突帯と共通するところが多く、その系譜関係が注目される。つまり、壺と円筒部の一体化した原形の情報を、相の谷１号墳の埴輪製作工人も持ち得ていた可能性がきわめて高いのである。また、初現期の朝顔形埴輪の変遷については、すでに加藤一郎、豊田祥三の両氏により検討が加えられており（加藤 2001、豊田 2005）、大まかには川西Ⅰ期（川西 1978）、鐘方氏の編年案（鐘方 2001・2003）ではⅠ期３段階に出現する要素であるという。但し、この属性は円筒埴輪の受け口状口縁と密接に関係すると思われ、相の谷１号墳には今のところ確認出来ないものであることから、本古墳出土の朝顔形埴輪は、そのモチーフ自体は古相を呈するものの、出現時期はその最終末、つまり定型化された朝顔形埴輪の出現前夜であるⅠ期末を想定したい。

また、製作技法上の問題としては、廣瀬氏の重要な指摘があり（廣瀬 2001）、「頸部外傾接合技法」の復元により、壺形土器（埴輪）から朝顔形埴輪への技術的変遷過程を検証している。相の谷１号墳では、朝顔形埴輪に伴うと判断できる明確な個体はないが、破片資料中に確実な頸部外傾接合のものが認められないことから、その製作には在地的もしくは「東四国系壺形埴輪」の製作技法が反映されているのかもしれない。

（４）地域内の埴輪出現および円筒・壺形埴輪の共伴関係

以上、主要器種である円筒埴輪・壺形埴輪に加え、可能性を含む朝顔形埴輪の個別検討を進めてきた。しかし、相の谷１号墳出土埴輪を検討するためには、個別器種を扱う視点のほかに、これらの共伴関係および埴輪祭式の評価を行うことが重要となる。次に、壺形埴輪と円筒埴輪の出現前夜およびセット関係から、相の谷１号墳の埴輪祭式を比較検討してゆきたい。

四国内における壺形土器の供献行為については、蔵本氏や森下英治氏（森下 1997）、古屋紀之氏（古屋 2002）も触れているように、東四国では弥生時代後期の段階から墳墓への土器供献（特に中型壺）が認められ、その後、古墳時代前期前葉の段階に底部焼成前穿孔の壺形土器を多量供献・囲繞する段階



第９図　古墳時代前期における地域色を有する「儀器」・「祭器」（古屋 2002 に一部加筆）

があり、以後、円筒埴輪の導入期にかけて継続した有力首長層の墳墓祭式として確認出来る。

一方、西四国（伊予）では、明確な弥生墳墓の様相が明らかでないこともあり把握は困難であるが、古墳時代初頭（庄内式新段階）には、少なくとも西条市・成福寺４号墳（柴田圭 2006）での広口壺などの日常土器の供献形態などは確認されているが、大きな画期としては、松山市・朝日谷２号墳（梅木編 1998）や西条市・大久保１号墳（柴田昌 2002）に代表され、柴田昌児氏もかつて触れている（柴田昌 2006）、二重口縁壺の供献行為が付加される布留０式（前期１）段階であると考える。

ここで問題視されるのは、壺形土器から「壺形埴輪」への移行段階である。東四国で認められる在地型広口壺の囲繞配置や一定量の供献行為（東四国系壺形埴輪の成立）が、伊予では外来系の二重口縁壺の配置という形で展開する点で大きな相違がみられる。焼成前穿孔の壺形土器の出現という両地域の共通項からは、一定の「儀器化」の兆しは認められるものの、伊予では「壺形埴輪」と呼称するには多量囲繞などの出土情報に乏しいことから、本地域での墳丘上での土器供献祭祀は、埴輪祭祀ではなく、あくまで外来的要素の選択性による一時的な祭祀形態と現段階では捉えておきたい。

その後、高松茶臼山古墳における円筒埴輪の導入を大きな画期として、東四国での埴輪祭式は大きな変革期を迎えることになるが、伊予では円筒埴輪の導入がやや遅れ、相の谷１号墳の築造段階で初めて導入されることになるのである。時間的に先行する妙見山古墳では、伊予中部を中心に展開した弥生器台の系譜を引くと考える「伊予型特殊器台」が認められるが、これは色濃い在地色が古墳時代

第４表　前期古墳の埴輪編年案（鐘方 2001・2003 に一部加筆・修正）

時期	古墳名			埴輪の消長				従来の編年案（埴輪）							東四国・壺
	大和	河内	山城	宮山型	都月型	都月系円筒	普通円筒	川西(1978)	都出(1981)	赤塚(1979)	広瀬(1992)	一瀬(1998)	坂(1998)	加藤(2000)	蔵本(2004)
Ⅰ－1	箸墓　弁天塚 中山大塚								Ⅰ		1	1古		Ⅰ	前1
Ⅰ－2	西殿塚	玉手山９号	元稲荷					Ⅰ		Ⅰ－1	2		Ⅰ－1		
Ⅰ－3	東殿塚 メスリ山	玉手山３号							Ⅱ			1中	Ⅰ－2	Ⅱ	前2・3
Ⅰ－4	西山 行燈山	玉手山１号	寺戸大塚												
Ⅰ－5	ノムギ	玉手山７号 松岳山	妙見山 平尾城山							Ⅰ－2 〜 Ⅰ－3		1新			前4・5
Ⅱ－1	東大寺山	萱振１号	瓦谷					Ⅱ	Ⅲ		3・4	2古	Ⅱ－1	Ⅲ	
Ⅱ－2	赤土山	五手治	天皇ノ杜 黄金塚２号									2中			前6・7

前期前葉においても墳墓祭祀に反映されるものであり[3]、未だ古墳総体としては「定型化」以前の様相と捉えられるものであろう。

また、壺形埴輪とのセット関係で言うと、相の谷１号墳の段階で初めて、広口壺形態の壺Ⅰ類を中心とした多量配置が想定され、伊予での「壺形埴輪」と呼称できる段階に到達したことを示している。円筒埴輪の導入段階での前方部を中心とした出土状況は、高松茶臼山古墳と同様、畿内的な円筒埴輪祭式の導入・編成過程を考える上で極めて大きな問題となるが、円筒埴輪が墳丘全周する段階（快天山古墳）では、壺形埴輪はむしろ衰退期を迎え、畿内的な円筒埴輪祭式が浸透し始める段階へと向かうことから、相の谷１号墳における埴輪祭祀の様相は、快天山古墳段階よりも、むしろ高松茶臼山古墳の段階に近似するものと考えられる。

さらに、製作工人の問題について若干触れておく。相の谷１号墳では円筒埴輪および壺形埴輪の調整行為および文様構成に、かなり共通した特徴を見出すことが可能である。特に、壺Ⅱ・Ⅲ類と円筒Ⅰ・Ⅱ類の文様構成（鋸歯文・竹管文）や、壺Ⅰ類の外面調整ハケにみられる円筒埴輪との共通性、さらには赤色顔料塗布（ベンガラ）の統一化は、各器種の製作技術系譜が「円筒＝畿内、壺＝東四国系」と異なるものの、実際は同一の集団が製作した可能性を補強するものと考えている。今回の検討では壺頸部の製作手法や、瀬戸内海を媒介とした東四国系壺形土器（埴輪）の広域拡散を前提として、讃岐からの工人移動を想定しておきたいが、実際には畿内中枢部との複雑な関係性の中から、その複合形態として誕生した個体であり、単純には讃岐との比較で判断するものではない。讃岐には認められない初期の朝顔形埴輪（朝顔Ⅱ類）の採用などは、上記を証明する一つの材料ともなろう。

5　おわりに　ー評価点と今後の課題ー

以上、雑駁な感もあるが、可能な限り相の谷１号墳の埴輪資料を吟味してきた。冒頭にも述べたとおり、本古墳は前方後円形を呈する古墳時代前期中葉の県内最大の古墳であり、今治平野のみならず、瀬戸内海沿岸を中心とした前期首長墳の展開を考える上で、極めて重要な調査事例である。埴輪資料についても、県内における導入期のものであり、前代の少数の壺形土器供献儀礼を払拭し、円筒・壺形埴輪の多量配置を認める地域内では先駆的かつ本格的な「定型化」された古墳であることが証明された。特に、壺形埴輪の製作手法上の特徴から、東四国、特に讃岐地方との密接な関係性を窺い知ることができ、円筒埴輪を含めた埴輪祭式の具体相を考察する上で有効な情報を提供することができたものと考える。

しかし破片資料で明確な出土位置情報が欠落することもあり、課題点もまた多い。特にくびれ部での朝顔形埴輪の出土状況などは、調査段階での出土状態で判断すべきものであり、復元が困難を極めている要因の一つである。また、在地での壺形土器の詳細な比較検討や、円筒埴輪の口縁部・基底部の個体数が極端に少ない点も、壺口縁部との比較検討の中で、現地で判断する必要がある。円筒埴輪については、更なる資料数の増加を待って再度検討を試みたいが、本稿では触れることの少なかった中国地方および九州地方の埴輪資料も視野に入れて、瀬戸内を媒介とした埴輪製作技法および埴輪祭祀の交流実態を把握する必要があるかもしれない[4]。筆者も以前、伊予における埴輪の様相を論じたことがあるが(山内 2006)、今後、伊予および瀬戸内周辺部における埴輪の出現と展開を語る上で、本古墳資料は欠くことの出来ないものとなることだけは間違いなかろう。

本稿は、第98回瀬戸内海考古学研究会での発表(「今治市相の谷１号墳出土遺物の再検討－出土遺物の保存処理・再整理成果を中心に－」)を骨子に文章化を試みたものである。やや検証不足の感は否めないが、本古墳出土埴輪の網羅的な資料調査は十分に進めたつもりである。

本稿をなすにあたり、冨田尚夫氏にはいつも多大なるご迷惑をお掛けしながらも、有意義な議論の場を設けて頂いたこと、心より感謝申し上げます。また、以下の諸学兄からは、本古墳埴輪に関する有益なご教示を頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げる次第であります。

大久保徹也、蔵本晋司、柴田昌児、清水真一、正岡睦夫、廣瀬覚、古谷毅、吉田和彦（順不同）

【補　記】

脱稿後、蔵本氏により高松茶臼山古墳出土の埴輪資料が公表され、従来の本古墳の編年観を下らせる必要性を説いている（蔵本 2007)。相の谷１号墳出土資料との併行関係を知る上で重要な指摘であり、別稿にて改めて論じることとしたい。

【註】

1）玉手山１号墳(安村編 2001)や同７号墳(岸本・高志編 2004)などで、円筒埴輪の口縁端部が屈曲し上端がナデにより尖る形状を呈する個体が多く認められることから、全て壺形埴輪とするには問題も残るが、相の谷１号墳の円筒埴輪片と比較すると、器壁厚や調整などの諸属性に相違がみられる点から、壺形埴輪の口縁部とするのが適当であると今回は判断した。

2）埴輪生産の生産について論じた高橋克壽氏は、４世紀の埴輪生産体制は「各地の首長が自らの裁量で、独自に組織した集団によって個性ある埴輪を並べた段階」と捉えている(高橋 1994)。

3）弥生器台の分布より、西部瀬戸内での広域的な地域色の継承と考える意見もある(下條 2006)。

4）近年、九州での埴輪資料の集成作業が進み(九州前方後円墳研究会 2000)、前期古墳の埴輪についての情報も増加している。調査成果では、伊予灘を挟む位置にある杵築市・小熊山古墳の埴輪資料(吉田編 2006)は、九州における円筒埴輪導入期の様相を知る上で不可欠であり評価できる。壺形埴輪については、竹中克繁氏の精力的な研究があるが(竹中 2004・2006)、在地色の濃い壺形埴輪の問題については、一括りに「九州」という枠で検討できるものではないと筆者は考える。

中国地方では、初期埴輪の展開から畿内政権との関係性について触れた古瀬清秀氏の論考(古瀬 1993)や、美作地方を主な対象として、前期古墳の埴輪を検討した山田俊輔氏の論考(山田 2000)、さらには二重口縁壺の集成作業を通じ、地域性や古墳への囲繞配列などの問題にも取り組まれた君嶋俊行氏の成果(君嶋 2004a・2004b）をあげることができる。今後、古墳時代前期の円筒埴輪が比較的多い吉備地域などとの関連性も注目されるところである。

【参考文献】

一瀬和夫 1998「古墳時代前期における円筒埴輪生産の確立」『古代』第105号

大久保徹也 1996「第５章　まとめ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告・第25冊　中間西井坪遺跡Ⅰ』、香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

加藤一郎 2000「前期古墳の円筒埴輪　－大和を中心に－」『遡航』第18号

加藤一郎 2001「埴輪の拡散」『玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』、柏原市教育委員会

鐘方正樹 2001「古墳時代前期の円筒埴輪編年と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』、柏原市教育委員会

鐘方正樹 2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号、埴輪検討会

岸本直文・高志こころ編 2004『玉手山７号墳の研究』、大阪市立大学日本史研究室

君嶋俊行 2004a「川東車塚古墳における二重口縁壺形土器の囲繞配列」『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅱ・川東車塚古墳の研究(発掘調査報告)』、吉備人出版

君嶋俊行 2004b「付編２　中国・四国地方の二重口縁壺形土器集成」『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅱ・川東車塚古墳の研究(発掘調査報告)』、吉備人出版

九州前方後円墳研究会 2000『九州の埴輪－その変遷と地域性－』、第３回九州前方後円墳研究会

蔵本晋司 1999「中間西井坪遺跡谷７出土土器について」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

蔵本晋司 2003「野田院古墳より出土した土器について」『史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書』、善通寺市教育委員会

蔵本晋司 2004「丸亀市吉岡神社古墳の再検討－供献土器のありかたを中心として－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅺ、㈶香川県埋蔵文化財調査センター

蔵本晋司 2007「高松茶臼山古墳の基礎的研究Ⅰ－円筒埴輪の整理から－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅲ』、香川県埋蔵文化財センター

近藤武司・大久保徹也 2004『快天山古墳発掘調査報告書』、綾歌町教育委員会

柴田圭子 2006「成福寺３・４号墳」『愛比売』平成17年度年報、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

柴田昌児 2002「大久保１号墳出土二重口縁壺について」『大久保遺跡・大久保１号墳』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

柴田昌児 2006「伊予における出現器古墳の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会資料集』分科会Ⅱ・瀬戸内の出現期古墳、日本考古学協会

下條信行・小玉亜紀子 1995「妙見山古墳」『季刊考古学』第52号、雄山閣
下條信行 2006「瀬戸内世界の社会と交通」『日本考古学協会2006年度愛媛大会資料集』、日本考古学協会
白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集
高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号、考古学研究会
竹中克繁 2004「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷とその意義－」『熊本古墳研究』第２号、熊本古墳研究会
都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』、京都大学文学部考古学研究室
豊田祥三 2005「朝顔形埴輪の誕生～その成立と展開の背景～」『立命館大学考古学論集Ⅳ』
坂靖 1998「古墳時代中期の埴輪生産をめぐって－埴輪文化の地域性・その後－」『中期古墳の展開と変革－５世紀における政治的・社会的変化の具体相(1)－』、埋蔵文化財研究会
東森市良・大谷晃二 1999「山陰の円筒形土器について」『島根考古学会誌』第16集
広瀬和雄 1992「第３章　前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成・近畿編』、山川出版社
廣瀬覚 2001「茶臼山型二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪　－頸部製作技法からみた系譜関係について－」『立命館大学考古学論集Ⅱ』、立命館大学考古学論集刊行会
廣瀬覚 2005「壺形埴輪の大型化とその背景－将軍山古墳出土壺形埴輪の検討から－」『将軍山古墳群Ⅰ－考古学資料調査報告書１－』、茨木市
廣瀬覚 2006「壺形埴輪の広域展開とその背景」『考古学研究会岡山６月例会発表資料』、考古学研究会
古瀬清秀 1993「初期埴輪と畿内政権」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』、広島大学考古学研究室
古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀－土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜整理－」『日本考古学』第14号、日本考古学協会
正岡睦夫 2002「今治市久保山古墳について」『遺跡』第39号、遺跡発行会
正岡睦夫 2004「北条市櫛玉比売命神社古墳の埴輪」『遺跡』第41号、遺跡発行会
松本洋明編 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』、天理市教育委員会
森下英治 1997「第６章　考古学的考察」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第28冊　国分寺六ツ目古墳』、香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
森毅 1983「愛媛県今治市伊賀、相の谷１号墳出土埴輪」『遺跡』第24号、遺跡発行会
安村俊史編 2001『玉手山古墳群の研究Ⅰ－埴輪編－』、柏原市教育委員会
矢部秋夫 1985「陣場山遺跡について」『瀬戸町資料集』、瀬戸町
山内英樹 2003a「埴輪研究の現状と課題－『基底部調整』をめぐる諸問題について－」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
山内英樹 2003b「円筒埴輪製作工程における『基底部調整』」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会
山内英樹 2003c「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(3)　－北条市浅海出土の埴輪について－」『紀要愛媛』第３号、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
山内英樹 2006「伊予における埴輪の一様相」『考古学研究会岡山例会11月例会発表資料』、考古学研究会
山田俊輔 2000「美作地方における前期古墳の埴輪」『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅰ・美作の首長墳(墳丘測量調査報告)』、吉備人出版
吉田和彦編 2006『小熊山古墳発掘調査報告書』、杵築市教育委員会

相の谷１号墳出土鏡の位置付けと今治平野出土銅鏡

冨田　尚夫

１．はじめに

今回報告した相の谷１号墳出土鏡二面については、名本氏により、その紋様の特徴の検討及び類例の提示が行われている（名本 1982・1983・1985)。ここでは、名本氏の研究とその後の研究の進展を再確認し、二面の銅鏡及び９号墓出土鏡の位置付けを明確にするとともに、近年出土した今治平野の銅鏡を概観し、当地域における銅鏡の受容について検討する。

２．相の谷１号墳出土鏡の位置付け

（１）禽獣画象鏡

名本氏は、本鏡の外区の連環唐草文（連続三葉紋）に着目し、この紋様帯を有する15面の資料を基にその特徴を検討している（名本 1985)。内区主紋には神人龍虎13例と禽獣２例があり、後者は「獣帯鏡に近い様子を示し、総じてみれば画像鏡の中にあっても最も簡略化の進んだ、年代的にも後出のものであろう。」と位置付けている。更に出土した古墳の分布・伴出鏡について考察している。

この名本氏の研究で指摘されているように、禽獣を内区主紋とする画象鏡が少なく、外区に連環唐草文（連続三葉紋）を有することは本鏡の特徴の一つといえる。

画象鏡に関する近年の研究では、上野氏による研究成果が注目される（上野 2001)。これは、後漢鏡の製作動向を考える上での一事例研究として位置付けられ、単位紋様の相関関係に基づいた型式分類を行い、時間軸と系列を整理している。型式分類では神像・獣像表現、主文、鈕座装飾、外区紋様、縁部形態、銘文について分類を行い、それぞれの組合せを分析している。神像・獣像表現については、細分類を行い、20の形式を設定している。更に銘文及び作鏡者銘から①尚方系、②呉郡系、③袁氏系、④尚方青盖系、⑤三羊系、⑥龍氏系、⑦劉氏系の７グループを系列として抽出している。そして、分布中心を製作地とみなし、系列ごとの製作地を想定し、製作動向を論及している。

相の谷１号墳鏡の紋様構成を再度整理すると、鈕を中心とし、その外周に連珠紋の鈕座がめぐる。鈕座と内区の間には一条の突線がめぐる。内区は四乳（１個欠損）で区切られ、鳥像と獣像が配される。その外側には一条の突線がめぐり、銘帯・外区となる。外区は内側から列線紋・鋸歯紋・連続三葉紋で構成される。連続三葉紋の外側にはそれぞれ一条の突線がめぐる。外区の内側斜面は無紋である。上野氏の分類では「デフォルメ四獣式C」に相当するもので、「劉氏系」「第三段階」に位置付けられる。製作年代は漢鏡７期（岡村 1993・1999）の２世紀後半に、製作地は華北東部系とのつながりをしめす系譜とされている。

日本出土の画象鏡については、福井県風巻神山４号墳出土画象鏡について考察した岩本氏が検討している（岩本 2003)。対象を古墳出土鏡に限定し、14古墳出土の16面を例示している。内区主紋は神人龍虎11面、神人車馬１面、禽獣３面、その他１面である。これを上野の分類（上野 2001）に照らし、袁氏系６例、劉氏系４例、尚方青盖系２例、呉郡系１例とし、時期と系列にバラツキがみられる

ことを指摘し、更に分類に含まれない資料を4例あることを指摘している。風巻神山4号墳出土鏡と関連性の強い資料として、相の谷1号墳鏡と奈良県黒石山古墳鏡を示す。また、外区の連続三葉紋に着目し、その年代を2世紀後半から3世紀初頭ごろに求めている。

今回の再整理で新たに得た知見としては、銘文の判読と、獣像表現の判明がある。銘文については従来「作竟真大」が判読されていた（名本 1985)。保存処理に伴うクリーニングの結果、「氏」と「山」が新たに判読することが可能になり、「氏」の前の文字も類例から「龍」と判読することも可能であると考える[1]。その結果、「龍氏作竟真大（巧上有）山（人)」という銘文を復元することが可能であり、後半の「上有山人不知老」という七言句の一部を省略したものと考える。類例としては東京国立博物館所蔵盤龍鏡（出土地不明）に「龍氏乍竟眞大巧上有山人不知老」がある[2]。

獣像表現では、鳥像の羽根、嘴、頭部、脚部と獣像の脚部の表現がより明確となった。獣像は脚部と胴部の表現から虎の可能性が強いと考える。

本鏡の類例としては、福井・風巻神山4号墳鏡、福岡・野方塚原鏡、奈良・黒石山古墳鏡があり、日本出土鏡の中でも類例が少ない中国鏡である。先述の上野氏、岩本氏の研究成果を援用すると、本

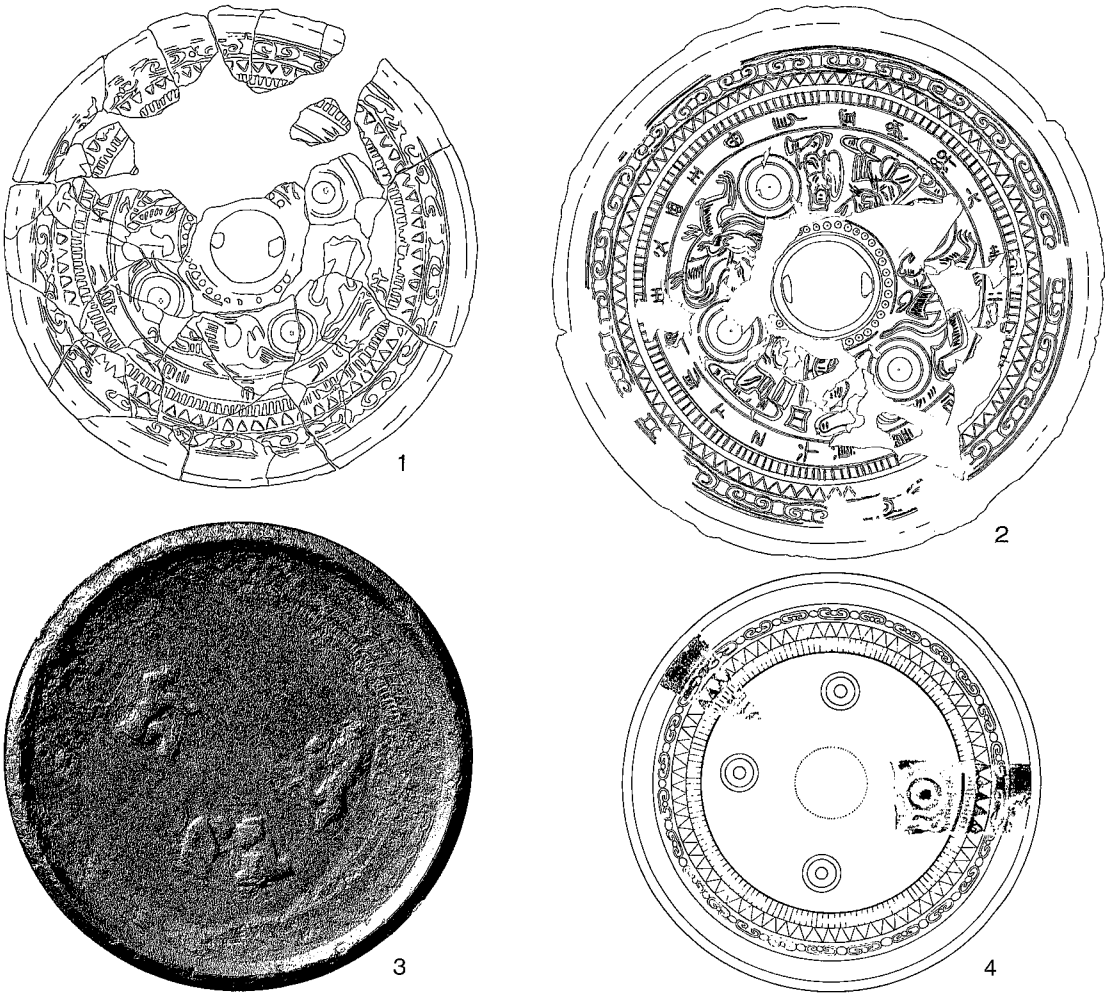


図1　相の谷1号墳出土禽獣画象鏡の関連鏡（S=1/2）
1－相の谷1号墳　2－風巻神山4号墳　3－黒石山古墳　4－野方塚原遺跡

鏡は漢鏡７期の２世紀後半から３世紀初頭に製作されたもので、製作地は華北東部に求めることができる資料である。

（２）鼉龍鏡（獣紋鏡[3]）

名本氏は本鏡の位置付けを検討する二論考を発表している（名本 1982・1983）。この一連の研究では、本鏡の紋様構成の中で特徴的な外区の捩紋帯に注目し、類例８面（名本 1983では３面を追加）を提示した上で、縁、外区、内区の属性を比較している。その結果、「捩文帯をもつ鏡鑑は、面径10～13cm程度の小型鏡であって、そのほとんどは素文平縁、外区は捩文帯と鋸歯文帯によって構成され、内区に４乳を配し、主文は捩文を有するものが50％以上に達し、他は獣形・神像等の簡略化されたものである」（名本 1982）とこれらの鏡群の特徴をまとめている。そして、捩紋の原型を鼉龍鏡の外区や画紋帯に表現された怪鳥紋帯であることを明らかにしている。また、「捩文帯を持つ鏡」の特徴について、出土古墳の分布及び伴出鏡の検討から①分布では関東から九州まで散在的なあり方を示すが、畿内・東海・北陸に空白が見られることと、②頭部や胸部に副葬されることが多い棺内遺物であること③共伴関係を持つ鏡がある場合はすべて舶載鏡であることを指摘している（名本 1983）。そして、製作集団についても「捩文帯を持つ鏡は画文帯神獣鏡からダ竜鏡に仿製化される段階で獣毛倭鏡として取り出され、畿内地方を中心とする製作集団とは別の、弥生時代以来の小銅鏡製作者集団の手によって製作されたものではなかろうか」と論及している。

この一連の研究では、捩紋帯の原型を明らかにしたことと、小型倭鏡（仿製鏡）の初現がそれまでの通説より遡ることを指摘している点が注目される。

この名本氏以降の研究では、近年研究が蓄積されている倭鏡（仿製鏡）研究において、分類及び型式編年研究が進められつつある（森下 1991・車崎 1993・新井 1995・辻田 2000・林 2000）。辻田氏は、主像紋様及び単位紋様の属性分析により２系列４型式の設定を行っている（辻田 2000）。相の谷１号墳鏡については、B 系③として第３型式（後半）に位置付けている[4]。林氏は単位紋様の属性分析を行い、３類６系列の分類案を提示している（林 2000）。相の谷１号墳鏡については、Ⅱ類単胴系に分類し、このⅡ類を前方後円墳集成編年（広瀬 1992）３期に位置付けている。

次に本鏡の紋様構成を再確認し、その特徴及び位置付けを検討する。紋様構成は、鈕を中心とし、その外側に一条の突線がめぐり、内区主紋・半円方形帯とつづく。内区主紋は四乳によって区画され、獣形四体を配する。内区外周は半円方形帯と斜面鋸歯紋・凹線から成る。外区は捩紋（羽状紋）帯と無紋の縁である。今回の保存処理に伴うクリーニングの結果、特に内区主紋の四体の獣形が明確となり、それぞれには羽状の表現が認められ、嘴と思われる表現が三体で確認できることから、これら四体の獣形は鳥像を表現したものと理解する。紋様構成の特徴をまとめると、外区に捩紋（羽状紋）帯、内区外周に半円方形帯、内区主紋に鳥像をそれぞれ配することといえる。本鏡と紋様構成が類似した資料は要素毎では確認することができるが、全ての要素が一致する資料は確認することができない。そのため、本鏡の位置付けを検討する上では、名本氏が指摘しているように外区の捩紋（羽状紋）帯が本鏡の特徴の一つであり、その捩紋が内区・外区の構成要素となる捩紋鏡との関連性に注目するこ

とが必要である。外区・内区に捩紋がある類例としては、次の資料が確認できる（表１）。

表１　相の谷１号墳出土鼉龍鏡（獣紋鏡）の関連鏡（羽状紋のある資料）

羽状紋の位置	鏡式名	古墳名／所蔵者	径(cm)	外区～内区外周紋様帯	内区主紋	備　考
外区	獣紋鏡	相の谷１号墳	11.6	¬羽紋‖斜鋸－半円‖	鳥像×４	愛媛12
	鼉龍鏡	黒岡山古墳	12.7	¬複鋸¬羽紋－斜鋸‖	獣形×４	兵庫132
		掛迫６号墳	10.8	¬複鋸¬羽紋‖斜鋸－半円‖	獣形×４	広島68
	神像鏡	山王寺桝塚古墳	12.3	¬羽紋－斜鋸－‖	神像×４	栃木９
	捩紋鏡	前橋天神山古墳	13.2	¬羽紋－斜鋸－‖‖	獣毛紋×５	群馬115
		蓮尺茶臼山古墳	12.2	¬複鋸¬羽紋－斜櫛－半円‖	獣毛紋×４	香川62
		小羽山12号墳	11.5	¬羽紋－斜櫛	獣毛紋×４	福井30
		伝　稲荷山古墳	13.2	¬‖羽紋‖‖斜櫛‖櫛‖	獣毛紋×４	京都79
		一宮天神山古墳	10.4	¬複鋸‖羽紋‖斜櫛‖	獣毛紋×８	岡山82
		国学院大学考古学資料館	10.1	¬羽紋－斜櫛	獣毛紋×５	
		五島美術館	10.8	菱雲¬羽紋－斜櫛‖	獣毛紋×４	
内区	捩紋鏡	楢原寺山古墳	13.8	¬複鋸－斜鋸－半円－斜素	獣毛紋×４	岡山203

凡例
本表は下垣2002を参考にして写真資料を基に作成した。紋様帯の略称は下記の通りである。
紋様帯の略称　羽紋＝羽状紋帯／斜鋸＝斜面鋸歯紋帯／斜素＝斜面素歯紋帯／半円＝半円方形帯／
複鋸＝複合鋸歯紋帯／菱雲＝菱雲紋帯／櫛＝櫛歯紋帯／‖＝無紋部分／¬＝段落ち
備考欄には国立歴史民俗博物館作成「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」の都道府県番号を記した。

これらの資料に共通する特徴としては、面径が10cm～13cmと小さいことが挙げられる。

また、内区主紋の鳥像を有する獣紋鏡には、森下分類（森下 2002）の鳥頭四獣鏡系の獣紋鏡（車崎編 2002）の他に左紀丸塚古墳（16.2／奈良26）・伝　持田古墳群（18.5／宮崎27）・園部垣内古墳（20.0／京都45）・五島美術館所蔵（14.6）があるが[5]、細部の表現までは類似していない。それ故、本鏡の主紋のモチーフは獣紋鏡よりも鼉龍鏡や捩紋鏡との関連が深いと考える。

鼉龍鏡と捩紋鏡の関連性についてはこれまでの研究で多く指摘されている（田中 1979・1981・車崎 1993・水野 1997・辻田 2000）。捩紋鏡の原鏡を鼉龍鏡とする見解（田中 1979・1981・森下 1991）に拠ると本鏡は鼉龍鏡と捩紋鏡のそれぞれの中間的要素を有し、鼉龍鏡から捩紋鏡への変容過程を示す資料として位置付けることが可能である。また、鼉龍鏡を原鏡として本鏡が製作されたとすれば、内区主紋の鳥像は鼉龍鏡（単頭双胴神鏡系）の外区紋様の怪鳥紋帯をモデルと考える。その要因としては、面径が小さいことから、外区の紋様の省略過程で主紋に用いられたと想定する。

本鏡の製作年代は、外区に怪鳥紋帯を有する鼉龍鏡をモデルに本鏡が製作されたとすれば、最古の鼉龍鏡とされる雪野山古墳２号鏡（岸本 1995）をその上限として考える。製作年代と副葬年代を勘案する必要があるが、雪野山古墳の年代を前方後円墳集成（広瀬 1992）２期と捉え、本鏡の製作年代は２期以降の前期前半以降として位置づけることとしたい。

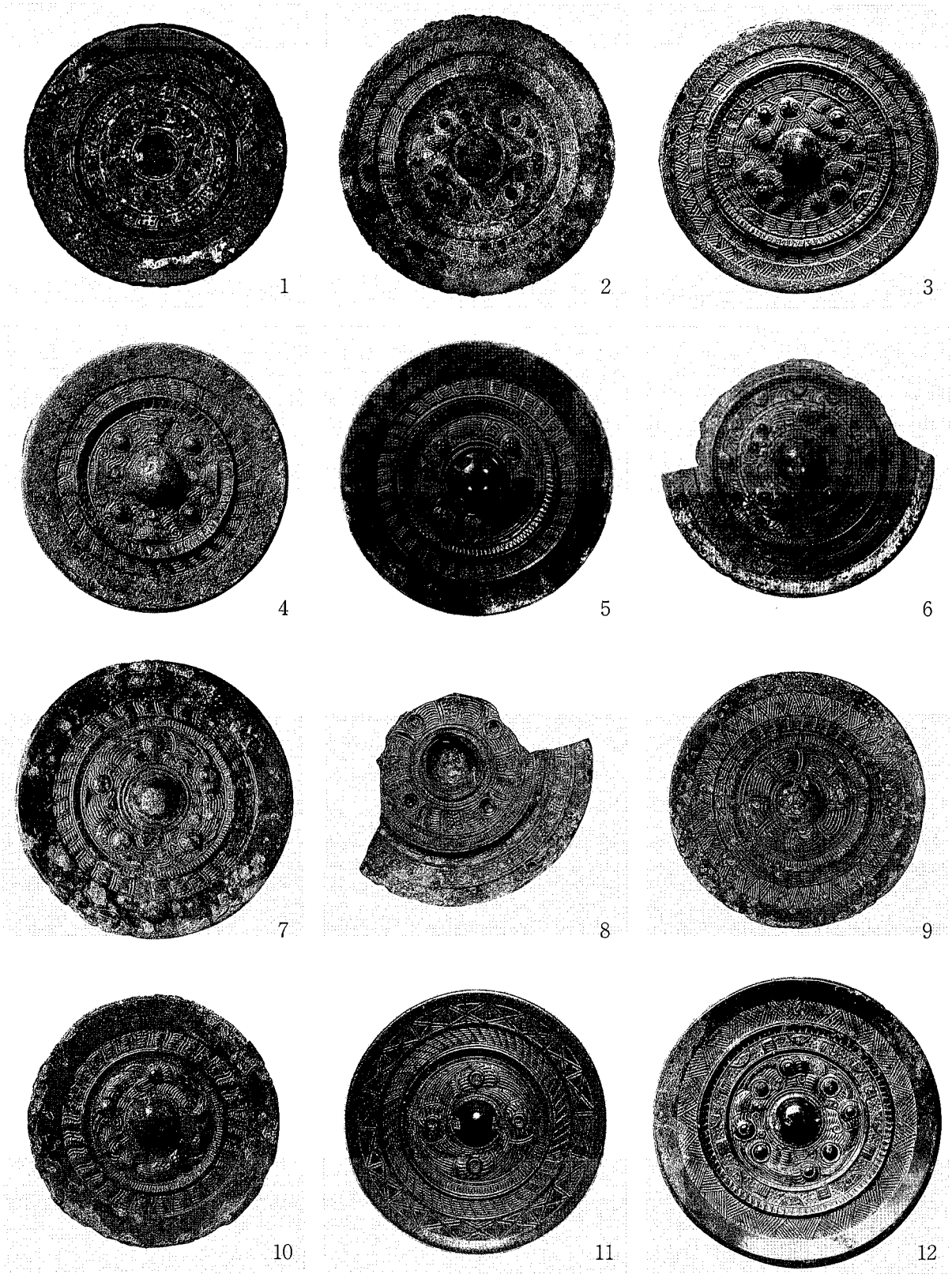


図２　外区・内区に捩紋（羽状紋）がある倭鏡（縮尺不同）

１－相の谷１号墳　２－黒岡山古墳　３－掛迫６号墳　４－山王寺桝塚古墳
５－前橋天神山古墳　６－蓮尺茶臼山古墳　７－小羽山12号墳　８－伝　稲荷山古墳
９－一宮天神山古墳　10－国学院大学考古学資料館蔵　11－五島美術館蔵　12－楢原寺山古墳

（3）相の谷9号墓出土鏡

同一個体の破鏡2点である。1号主体の箱式石棺の頭部付近から出土している。紋様構成は、内側から乳座のある乳を含む主紋帯、圏線、櫛歯紋帯、鋸歯紋帯、圏線、流雲紋帯から成る。内区の主紋はほとんど残存せず、鏡式を確定する要素は内区外周から外区の紋様構成となる。櫛歯紋、鋸歯紋、流雲紋で構成される鏡式としては、細線式獣帯鏡と方格規矩四神鏡が該当し、内区に「規矩」部分が見られないことから、細線式獣帯鏡である可能性が高いと考える。また、2点ともに1箇所ずつの穿孔が認められる。なお、出土時には1点にひもが残存していたことが報告されており（正岡・泉本1973)、縣垂鏡として使用されたことが想定できる。

この破鏡については、正岡氏が今治市雉之尾2号墳出土破鏡とともに、西日本での集落及び埋葬遺構での出土例を検討している（正岡 1979)。副葬された主体部には箱式石棺・木棺直葬・土器棺が多いことを指摘し、今治市の2例では隣接する前方後円（方）墳の被葬者との関連について「鏡片の所有者とは異なった位置にあること」を指摘していることが注目される。

近年の研究では、辻田氏が穿孔と形態から破鏡の分類を行い、破鏡の出現と流通について考察している（辻田 2005)。特に、古墳時代前期の副葬事例の検討で、近畿以西では約3/4が墓への副葬であり、古墳時代前期に墓への副葬が一般化しているという指摘は、相の谷9号墓鏡を検討する上で重要である。

今治平野では、雉之尾2号墳（三好 1968・正岡 1979）及び高橋仏師Ⅰ遺跡 SM－01（池尻 2005）において穿孔のある破鏡の副葬が確認されている。遺構の年代は、出土土器から高橋仏師Ⅰ遺跡 SM－01が古墳時代前期1に位置付けられ（柴田 2006)、雉之尾2号墳・相の谷9号墓1号主体では、土器が確認されていないが、副葬品の組成が高橋仏師Ⅰ遺跡 SM－01と大きく異ならないことから、古墳時代前期前半に位置付けることが可能であると考える。このように今治平野において穿孔のある破鏡の副葬が古墳時代前期に3例確認されていることは、当地域への銅鏡の受容を検討する上で注目される。特に、相の谷9号墓の位置付けを考える際には、この破鏡の副葬は、注目されるものである。

3．今治平野出土銅鏡について

今治平野出土の銅鏡については、正岡氏により集成作業が行われ、21例が紹介されている（正岡1985)。1960年～1970年代の開発に伴う発掘調査で資料数が増加したことが指摘されているが、その後、国立歴史民俗博物館作成の「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」（白石・設楽編）では26例が提示されている[(6)]。1990年代以降の発掘調査では、集落遺跡での検出例の増加が注目される。ここでは、近年の発掘調査で出土した資料を中心に紹介し、今治平野における銅鏡の受容について検討することとしたい。なお、時期比定にあたっては柴田氏による伊予東部地域の土器編年研究（柴田2000・2006）を適宜援用する。

（1）弥生時代後期

野々瀬Ⅳ遺跡（柴田 2000）

土器溜りから小型仿製内行花紋鏡（径7.7～8.3cm）が出土している。伴出している土器は後期3に位置づけられている。高倉氏の小型仿製鏡分類（高倉 1985）の第Ⅰ型b類に相当する。内区から外区にかけて残存しており、不整形に変形している。紋様構成は内行花紋帯と櫛歯紋帯の一部を確認することができるが、鈕を中心とした内区は残存していない。縁部には湯道と考えられる部分が残存している。柴田氏により製作途中で廃棄されたことが想定されており、今治平野での小型仿製鏡の生産の可能性を示唆する事例である。

高橋山崎遺跡（小野編 2004）

自然流路から小型仿製内行花紋鏡（径5.8cm）が出土している。高倉分類（高倉 1985）の第Ⅱ型a類に相当する。伴出している土器は後期初頭～後期末のものがあり、時期を特定することはできない。周辺では中期末から後期にかけての竪穴住居跡が検出されており、弥生時代後期の集落遺跡で小型仿製鏡が保有されていたことを示す事例である。

高橋湯ノ窪遺跡（廣田他 1997）

遺物包含層から破鏡1点が出土している。外区から縁にかけての破片で、内側から櫛歯紋、鋸歯紋、波紋、鋸歯紋が確認できる。この紋様構成から細線式獣帯鏡か方格規矩鏡の可能性が指摘されている。時期を特定することはできないが、周辺での3次に亘る調査で弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡や土坑が検出されており、該期の集落遺跡で破鏡が保有されていたことを示す事例である。

（2）古墳時代前期

松木広田遺跡（白石編 2002b）

土坑SK－18から重圏紋鏡1点が出土している。伴出している土師器は、古墳時代前期2（柴田 2006）に相当する。この土坑からは碧玉製管玉やガラス小玉、短剣、袋状鉄斧、刀子が出土しており、祭祀的性格が強い。重圏紋鏡（復元径5.1cm）は、内区から外区の破片で面径の約1/2が残存している。紋様構成は圏線と櫛歯紋が認められるが、鋳出しは浅い。縁は面を有さず外反するのみである。当地域では初出の集落遺跡出土の小型倭鏡である。

高橋仏師Ⅰ遺跡 SM－01（池尻 2005・柴田 2006）

墳形が明確でないが、前方後円形墳墓の可能性のある古墳の1号主体から穿孔のある破鏡1点が出土している。外区から縁にかけての破片で、内行花紋鏡と考えられる。伴出遺物には土師器壺・高坏、鉄鏃、ガラス小玉、管玉があり、主体部直上からは赤色顔料の付着した石杵が出土している。先述したように、土師器は古墳時代前期1（柴田 2006）に位置付けられ、古墳時代前期の穿孔のある破鏡の副葬事例の一つとして注目される。

別名一本松古墳（山内 2006・小笠原編 2002）

全長約30mの前方後円墳の第1主体から神獣鏡1面、第2主体から内行花紋鏡1面が出土している。

神獣鏡（径11.0cm）は、四体の神像の頭部と獣毛を表現した獣形から成り、外区は無紋の縁と複合鋸歯紋帯で構成される。神像表現が省略された獣毛鏡に近い倭鏡である。内行花紋鏡（径14.3cm）は、四葉座、圏帯、８弧の連弧紋から成り、銘文は確認できない。岡村氏の分類（岡村 1993）の四葉座ＶＡ式に相当し、岡村編年の漢鏡６期に位置付けられる。伴出遺物には、第１主体では、鉄剣、土師器壺、ガラス小玉があり、第２主体では、鉄剣、不明鉄器、ガラス小玉、管玉がある。土師器から前期後半の副葬が想定され、該期の倭鏡と中国鏡の副葬事例として位置付けることができる。

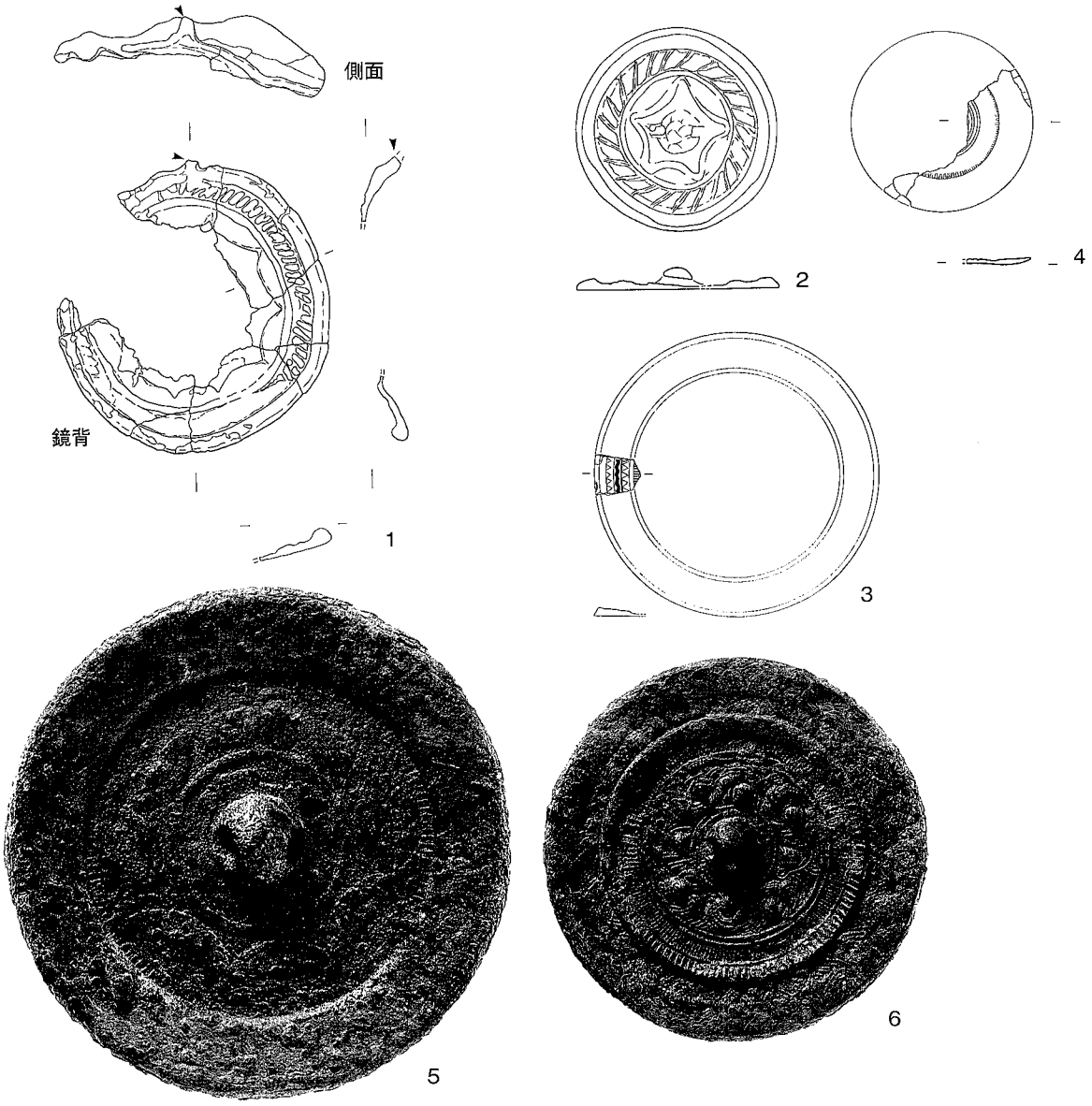


図３　近年出土の今治平野銅鏡（S=1/2）

１－野々瀬Ⅳ遺跡　２－高橋山崎遺跡　３－高橋湯ノ窪遺跡　４－松木広田遺跡
５・６－別名一本松古墳

（3）弥生時代後期～古墳時代前期における銅鏡の受容

先に紹介した今治平野出土の新出資料と既出資料を合わせて、当地域における銅鏡の受容について検討する。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての銅鏡は次の資料が確認されている（表2）。今治平野は、愛媛県内、西部瀬戸内地域においても、銅鏡の分布が集中する地域の一つである。当地域における銅鏡の受容を、鏡種、鏡式、出土遺跡の性格、出土状態から次のような段階設定を設けて、銅鏡の受容の諸段階があったことを想定する。

表2　今治平野出土銅鏡一覧

	鏡　式　名	遺跡・遺構名	遺跡	墳形／規模(m)	遺　構	遺構の年代	遺存度・面径(cm)	出土年	備　考
1	禽獣画象鏡	相の谷1号墳	古 墳	前円／80.8	竪穴式石槨	古墳前期	欠損　12.6	1965	愛媛11
2	龍鏡（獣紋鏡）	相の谷1号墳	古 墳	前円／80.8	竪穴式石槨	古墳前期	完形　11.4	1965	愛媛12
3	獣帯鏡	相の谷9号墓1号主体	台状墓	方／13	箱式石棺	古墳前期	破片（17.0）	1966	愛媛13／破鏡
4	重圏紋鏡	雉之尾1号墳	古 墳	前方／32.5	木棺直葬	庄内～古墳前期	完形　5.7	1965	愛媛14
5	内行花紋鏡	雉之尾2号墳	古 墳	円／10？	箱式石棺	古墳前期	欠損（15.8）	1965	愛媛15／破鏡
6	神像鏡	雉之尾3号墳	古 墳	方／17	粘土槨	古墳前期	欠損　10.1	1969	愛媛16
7	三角縁神獣鏡	国分古墳	古 墳	前円／44	竪穴式石槨	古墳前期	完形　21.5	不明	愛媛20
8	斜線四獣鏡	国分古墳	古 墳	前円／44	竪穴式石槨	古墳前期	完形　11.8	不明	愛媛21
9	重圏紋鏡	唐子台第5丘7号墓	墳 墓	円／25？	土壙墓	庄内～古墳前期	完形　5.7	1972	愛媛23
10	内行花紋鏡	唐子台第14丘墓	墳 墓	円／10？	土壙墓	庄内～古墳前期	完形　12.5	1972	愛媛24／破砕
11	内行花紋鏡	治平谷7号墳	古 墳	円／15～18？	粘土槨	古墳前期	完形　13.2	1972	愛媛25／破砕
12	斜線四獣鏡	妙見山1号墳2号石槨	古 墳	前円／55	竪穴式石槨	古墳前期	完形　11.35	1993	愛媛88／破砕
13	細線式獣帯鏡又は方格規矩鏡	高橋湯ノ窪遺跡包含層	集 落		遺物包含層	弥生後期	破片（16.0）	1995	愛媛91／破鏡
14	弥生小形仿製内行花紋鏡	野々瀬Ⅳ遺跡B2区土器溜り	集 落		土器溜り	弥生後期	欠損7.7～8.3	1995	愛媛93
15	神獣鏡	別名一本松古墳	古 墳	前円／30	木棺直葬	古墳前期	完形　11.0	2000	
16	内行花紋鏡	別名一本松古墳	古 墳	前円／30	木棺直葬	古墳前期	完形　14.3	2000	
17	重圏紋鏡	松木広田遺跡 SK－18	集 落		土坑	古墳前期	欠損（5.1）	2000	
18	弥生小形仿製内行花紋鏡	高橋山崎遺跡	集 落		川底	弥生後期	完形　5.8	2003	
19	内行花紋鏡	高橋仏師Ⅰ遺跡	古 墳	前円？／23.5	木棺直葬	古墳前期	破片	2004	破鏡

凡例　墳形の略号は次の通りである。前円－前方後円墳　前方－前方後方墳　方－方墳　円－円墳
備考欄には国立歴史民俗博物館作成「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」の都道府県番号を記した。

①　小型仿製鏡の受容・破鏡の受容（弥生時代後期中葉以降）

小型仿製鏡の流入時期を明確にすることはできないが、野々瀬Ⅳ遺跡、高橋山崎遺跡の事例から後期中葉以降に小型仿製鏡の受容を確認することができる。また、高橋湯ノ窪遺跡の破鏡の出土例から破鏡もこの時期に流入し、保有されていたと考える。

②　小型倭鏡祭祀・副葬　破鏡の副葬（古墳時代初頭～前期前半）

小型倭鏡（重圏紋鏡）が、墳墓に副葬され（唐子台第5丘7号墓・雉之尾1号墳）、前代から保有されていた破鏡も墳墓に副葬される（相の谷9号墓・雉之尾2号墳・高橋仏師Ⅰ遺跡）。松木広田遺跡では小型倭鏡を用いた集落祭祀が確認されている。

③　中国鏡の副葬（古墳時代初頭～）

墳墓への中国鏡の副葬は、唐子台第14丘墓・治平谷７号墳・妙見山１号墳で確認できるが、いずれも完形鏡一面を破砕している。国分古墳では、三角縁神獣鏡と四獣鏡が破砕せずに副葬されている。

④　中国鏡十倭鏡の副葬（古墳時代前期前半～）

倭鏡が副葬されるのは、相の谷１号墳が初例である。中国鏡を伴うのは、本古墳のみである。別名一本松古墳では、主体部毎に倭鏡一面と中国鏡一面が確認され、その構築順序が注目される。

⑤　倭鏡の副葬（古墳時代前期後半～）

別名一本松古墳第１主体部・雉之尾３号墳で倭鏡一面のみの副葬が確認できる。

以上のように、銅鏡の出土が集中する当地域においては、銅鏡の受容に５段階の設定が可能である。

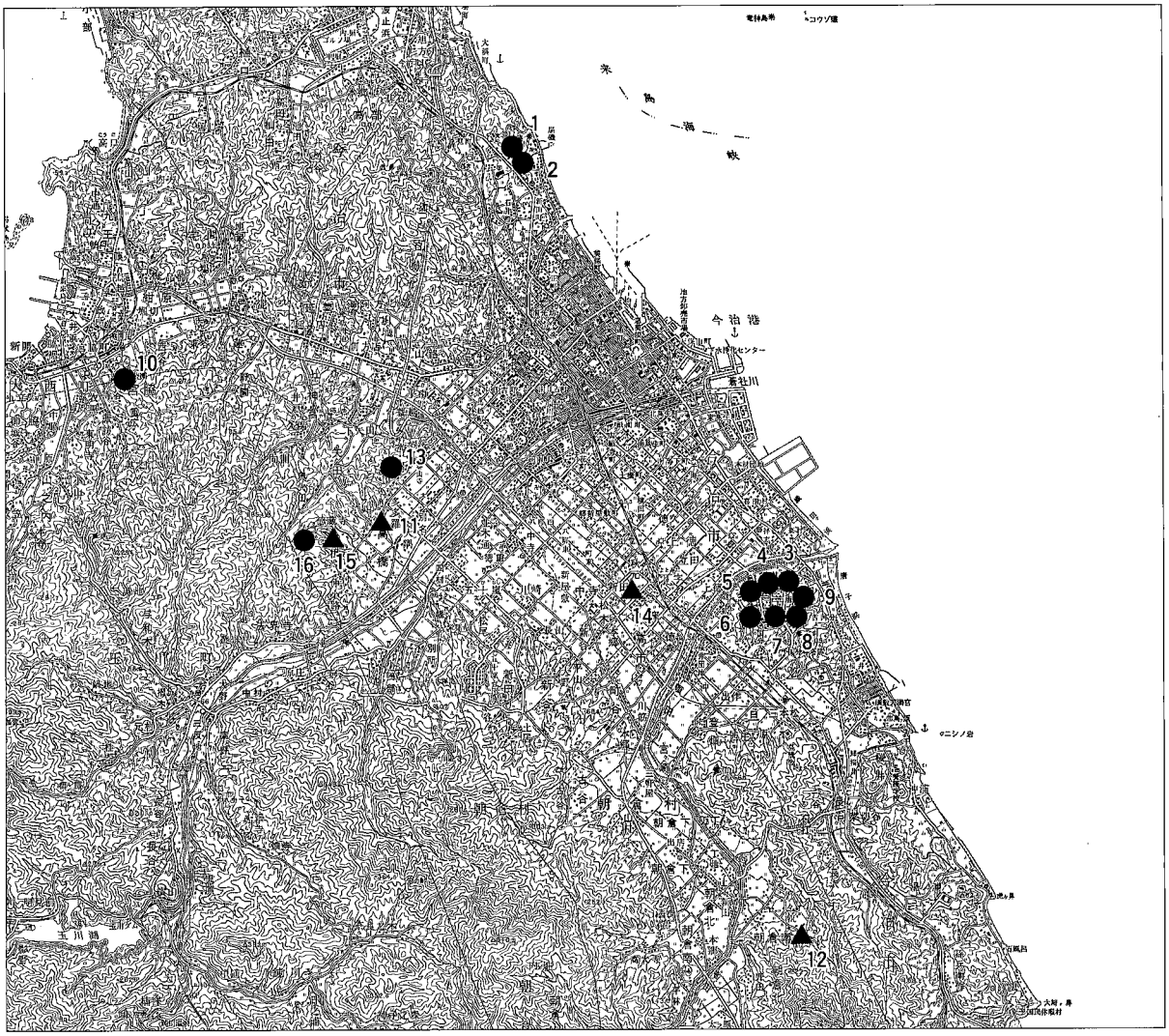


図４　今治平野銅鏡出土地位置図　S＝１：100,000

（●ー墳墓遺跡　▲ー集落遺跡）

１ー相の谷１号墳　２ー相の谷９号墓　３ー雉之尾１号墳　４ー雉之尾２号墳　５ー雉之尾３号墳
６ー国分古墳　７ー唐子台第５丘７号墓　８ー唐子台第14丘墓　９ー治平谷７号墳
10ー妙見山１号墳　11ー高橋湯ノ窪遺跡　12ー野々瀬Ⅳ遺跡　13ー別名一本松古墳
14ー松木広田遺跡　15ー高橋山崎遺跡　16ー高橋仏師Ⅰ遺跡

その流入は、弥生時代後期末から古墳時代前期の政治的変動と大きく連動していると思われる（田崎 1995)。また、複数面の出土が少なく、大量の出土が認められないことから、この受容は、当時の銅鏡流通の実態を反映しているものと考える。特に、墳墓への破鏡・完形鏡の副葬が開始される古墳時代初頭における墳墓祭祀の動向は瀬戸内地域の一事例として西日本の中でも注目できるものである。

4．まとめ

以上、先行研究を引用しつつ、相の谷１号墳出土鏡及び同９号墓出土鏡の位置付けを検討してきたが、これらの銅鏡及び今治平野出土銅鏡の性格を検討して、本稿のまとめとしたい。

相の谷１号墳及び同９号墓１号主体出土鏡は、両墳（墓）の位置関係から一地域・一集団への銅鏡の受容を考える際の一つのパターンとして位置付けることが可能である。つまり、弥生時代後期末に流入した破鏡を保持し、副葬した集団が、その後、前方後円墳を築造し、入手した中国鏡・倭鏡を副葬したと想定する。同じような一地域・一集団による銅鏡の受容パターンは雉之尾１号墳・同２号墳・同３号墳においても認めることができるが、その鏡式は、地域によって異なり、先に設定した銅鏡受容のどの段階で銅鏡を入手するかによって異なるものと考える。更に、各古墳・各集団における銅鏡の意味・性格が異なっていることが想定できる。

仿製鏡の製作開始時期・生産体制の再検討を論じだ楠元氏は、古墳時代の鏡群の性格を次の二大別に区分している（楠元 1993)。①「政権中枢から配布・下賜され、その保有をもって地位・権益等が保証される政治性の強い鏡」と、②「単に自己の属する集団の枠内での社会的地位を表示したり、化粧具さらには埋葬儀礼用品としての鏡」という区分である。

この区分を今回検討した今治平野出土鏡に充てると、相の谷１号墳や国分古墳のような前方後円墳に副葬された中国鏡は、①の性格が該当するものと考える。次に、相の谷９号墓１号主体や雉之尾２号墳、高橋仏師Ⅰ遺跡に副葬された破鏡や雉之尾１号墳や唐子台第５丘７号墓に副葬された小型倭鏡、治平谷７号墳のように前方後円墳以外に副葬された中国鏡は、②の性格が該当すると考える。

なお、相の谷１号墳出土倭鏡について、名本氏は①のような政治性を認めず、「在地首長層の地域性豊かな遺物」として位置付けている（名本 1982)。一方、車崎氏は、面径の大きさを基に畿内政権の信任の程度を示すことを指摘し（車崎 1993)、政治性を強調している。両者には、その生産体制の評価の違いがあり、更に地域の前方後円墳と中央政権の関連をどのように評価するかという違いがある。全長80mの前方後円墳の副葬鏡として本鏡を位置付けるにあたっては、類似した属性を散見する現状において、特定工房での生産を想定し、中央での一元管理を想定することが妥当と考える。なお、他地域の前方後円墳以外の小規模古墳において類似した倭鏡が出土する事例については、地域首長間における流通を想定する。

以上のように、相の谷１号墳出土の二面の銅鏡は、本墳と中央政権との関連の度合いを示す一指標と考える。

【謝辞】

本稿を作成するにあたって、次の機関・個人の方に種々のご教示を得るとともに資料調査及び写真の転載についてご高配を得ました。記して深謝いたします。

今治市教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター・愛媛県教育委員会・

岡山理科大学人類学教室・国学院大学考古学資料館・㈶五島美術館・㈱小学館・

太子町教育委員会・広島県立府中高等学校・広島県立歴史博物館・福井市立郷土歴史博物館・

藤岡町教育委員会・伏見稲荷大社

池尻伸吾・岡田敏彦・柴田昌児・白石　聡・寺元洋子・水上人江・森下章司・山内英樹

（五十音順・敬称略）

【註】

(1) 銘文判読にあたっては、参考事例として宮石編1992を参照した。

(2) 銘文の類例については、三木1988を参照した。

(3) 本鏡の名称については、名本1982において検討の必要性が提起されている。鼉龍鏡という名称については、森下1991以降の研究では、単頭双胴神鏡系とそれを原鏡とする獣毛鏡系・俵紋鏡系・羽紋鏡系という系列による分類が提示されている。後述するように、今回のクリーニングの結果、内区主紋が鳥像であることが明確になったことから、本鏡の名称は「獣紋鏡」とすることが適当と考える。なお、鏡式名については、森下2002の倭鏡の分類を参考とした。

(4) その後の論考（辻田2006）では、B系③を2b型式以前まで遡らせる見解を提示しており、本鏡を含めた型式編年研究はまだ流動的な部分がある。

(5) 本鏡の類例の一部については、森下章司氏よりご教示を得ました。記して深謝します。なお、古墳名の後には面径cmと国立歴史民俗博物館作成「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」（白石・設楽編 1994）の都道府県番号を記した。鳥像を内区主紋とする類例資料の検索は車崎編 2002を基に行った。

(6) 2002年の補遺（白石・設楽編 2002）では、3例が追加されている。

【参考・引用文献】

新井　悟　1995「鼉龍鏡の編年と原鏡の同定」『駿台史学』第95号　駿台史学会

池尻伸吾　2005「高橋仏師Ⅰ遺跡」『愛比売－平成16年度年報－』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

石川むつみ・折尾　学編　1996『野方塚原遺跡』福岡市教育委員会・野方塚原遺跡調査会

岩本　崇　2003「風巻神山4号墳出土鏡をめぐる諸問題」『風巻神山古墳群』福井県清水町教育委員会

上野祥史　2001「画象鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第86巻第2号　日本考古学会

小笠原善治編　2002『伊豫の鏡』松山市考古館

岡村秀典　1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集　国立歴史民俗博物館

岡村秀典　1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館

小野倫良編　2004『高橋山崎遺跡Ⅰ』今治市教育委員会

岸本直文　1996「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究　考察篇』八日市市教育委員会

楠元哲夫　1993「古墳時代仿製鏡製作年代試考」『大和宇陀地域における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会

宮内庁書陵部陵墓調査課編　2005『宮内庁書陵部所蔵　古鏡集成』学生社

車崎正彦　1993「鼉龍鏡考」『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』

車崎正彦編　2002『考古資料大観』第5巻　小学館

柴田昌児　2000「湯道を残す鏡と後期弥生土器」『紀要愛媛』創刊号　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

柴田昌児　2006「伊予における出現期古墳の様相」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会

柴田昌児　2007「伊予における前期古墳とその画期」『第11回　中国四国前方後円墳研究会発表要旨集　前期の中の画期』中国四国前方後円墳研究会

下垣仁志　2002「小羽山12号墳出土鏡と古墳時代前期倭製鏡」『小羽山古墳群』福井県清水町教育委員会
白石　聡編　2002a『高橋湯ノ窪遺跡－第３次調査－』今治市教育委員会
白石　聡編　2002b『松木広田遺跡（松木遺跡群）Ⅰ』今治市教育委員会
白石太一郎・設楽博己編　1994「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集　国立歴史民俗博物館
白石太一郎・設楽博己編　2002「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成　補遺１」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集　国立歴史民俗博物館
高倉洋彰　1985「弥生時代小型仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第３号　日本考古学会
田崎博之　1995「瀬戸内における弥生時代社会と交流」『瀬戸内海地域における交流の展開　古代王権と交流６』名著出版
田中　琢　1979『日本の原始美術８　古鏡』講談社
田中　琢　1981『古鏡　日本の美術』№178　至文堂
辻田淳一郎　2000「鼉龍鏡の生成・変容過程に関する再検討」『考古学研究』第46巻第４号　考古学研究会
辻田淳一郎　2005「破鏡の伝世と副葬－穿孔事例の観察から－」『史淵』第142輯　九州大学大学院人文科学研究院
辻田淳一郎　2006「鏡と副葬品」『第９回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨・資料集　前期古墳の再検討』第９回九州前方後円墳研究会大分大会実行委員会
名本二六雄　1982「捩文帯を持つ鏡－相の谷古墳出土鏡の占める位置」『遺跡』第22号　遺跡発行会
名本二六雄　1983「続　捩文帯を持つ鏡」『遺跡』第24号　遺跡発行会
名本二六雄　1985「相の谷１号墳出土禽獣画像鏡について」『遺跡』第28号　遺跡発行会
林　正憲　2000「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』第85巻第４号　日本考古学会
広瀬和雄　1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
廣田秀久・小野倫良・白石　聡編　1997『高橋湯ノ窪遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
正岡睦夫　1979「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号　古代学研究会
正岡睦夫　1985「今治平野周辺出土の銅鏡」『遺跡』第27号　遺跡発行会
正岡睦夫・泉本知秀　1973「愛媛県今治市近見相の谷９号墓調査報告」『古代学研究』第67号　古代学研究会
三木太郎　1988『古鏡銘文集成』新人物往来社
水野敏典　1997「第３節　捩文鏡の編年と製作動向」『日上天王山古墳』津山市教育委員会
宮石智美編　1992『「小校経閣金文拓本」所載漢式鏡銘文一覧』三月書房
三好保治　1968「二つの石棺より検出された破砕鏡片」『四国考古学古代史研究』創刊号　四国考古学古代史懇談会
森下章司　1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第６号　史学研究会
森下章司　2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観』第５巻　小学館
山内英樹　2006「別名一本松古墳」『愛比売－平成17年度年報－』㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

【挿図出典】

図１　１－本書　２－岩本 2003　３－宮内庁書陵部編 2005　４－石川・折尾編 1996
図２　１－本書　２・３・４・７・８・９・10・11・12－車崎編 2002（なお、転載にあたっては所蔵者の承諾を得た。）５・６－東京国立博物館　Image：TNM Image Archives Source : http : //TnmArchives.jp/
図３　１－柴田 2000　２－小野編 2004　３－廣田他 1997　４－白石編 2002b　５・６－小笠原編 2002